

せしに合せられたるにはあらず。只かたはらに侍る人、海士の齒の白きはいかに、猫の齒の冷じてなど、似て似ぬ思ひよりの發句にはなるまじき事どもに作意をかすめ侍るゆへ、予が句先にして、師の句弟と分け、其換骨をさとし侍る。師説もさのごとく聞え侍るゆへ、自評を用ひすして句法をのぶ（下略）

と記し、「三冊子」に土芳は

この句、師のいはく、心遣はずと句になるもの自賛にたらずと也。「鎌倉を生て出けん初鯉」といふこそ心の骨折人のしらぬ所也。又いはく、「猿の齒白し峰の月といふは其角也。「鹽鯛の齒ぐきは我老吟也。下を魚の棚とたと言たるも自句也といへり。

と云ひ、支考は「十論爲辯抄」に

實情と手づまの證文を論ぜは（句は略す）されば其角が猿の齒は、例の詩を尋ね歌をさがして、かれてといふ字に斷腸の情を盡し、峰の月に寂寞の姿をうつし、何やらかやら集めぬれば人を驚かす發句となれり。祖翁のは鹽鯛のみにして、俳諧する人も女子も童も云ふべけれど、たとひ十知の手とても及ばぬ所は下の五文字なり。爰に初心と名人との口にいふ所は同じけれど、意に知る所の

千里なるを信ずべし。今いふ其角も我輩もたどへ鹽鯛の齒ぐきを案ずるとも、魚の棚は行過ぎて鹽鯛のさびに木具の香をよせ、梅の花の風情を結びて、甚深微妙の嫁入をたくむべし。祖翁は其日其時に神々の荒の吹盡し、さゞわも見えず乾あがりたる魚の棚の淋しきを云へり、（下略）

と云つてゐる。要するに其角の猿の齒は理想の所産で、且つそれを理解するには漢詩の豫備智識を要し、芭蕉の鹽鯛は實感の所産で、しかも同じ實感でも、たと鹽鯛の齒莖を見て、それに配合するに他物を以てするやうな作爲的のものではなく、「魚の店」の其場合に於ける鹽鯛から「も」によつて、あたりの風物のすべての寒さをシンボライズしてゐる。そこが其角の猿の齒に比べて優越なる所以である。

葱白く洗ひたてたるさむさ哉

（韻 塞）

晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元祿五年説とするにしたがふ。

田園の臘目で、「たてたる」の四文字で、この葱は少量のものでなく、百姓が市に出す爲めの澤山の葱

を、白々と洗ひたてた、その白さかららひし／＼と感得する寒さなるかな、と詠歎したのである。

たのむぞよ寝酒なき夜の古紙子
たのむぞよ寝酒なき夜の紙衾

(濱ゆふ)

(一葉集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元祿五年説とするにしたがふ。「濱ゆふ」には「戯書の句」とあり、「一葉集」には「畫賛」とある。

寝酒のない今宵は 紙衾よ、そなたばかりをたのむぞよ、といふので、いかにも戯れ繪の賛であらう。

深川大橋半かゝりける比

初雪やかかけかゝりたる橋の上

(其 便)

「嵯奥千鳥」に

未の十月下旬東武に赴き「都出て神も旅寐の日數かな」と吟じて、深川の草扉を閉ぢ、ひそかに門

を覗きては「初雪やかかけかゝりたる橋の上」など獨ごちて閑に送るものし。

とあるので、未年即ち四年の作の如くに見られるが、深川に居を營んだのは確かに五年夏であり、また新大橋の就つたのは元祿六年であるから、此句は其工事中の五年の作である。

架けかゝりたる橋の上の初雪やナア、と其美觀を詠歎したのである。

寒山自畫自讚(在許六家藏)

庭はききて雪をわするゝはゝきかな

(篇 突)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿五年説とするにしたがふ。

寒山が卷物を展べ、拾得が箒を手にして、ともにそれを見るの圖は世間熟知のものである。それで此畫にはたゞ寒山のみを描きたるものに、拾得は文字を以て表したものであらう。拾得は天臺山國清寺の豐干禪師が、門前の捨子を拾つて養つたもので、寒山は其近くの山に棲んで、國清寺に拾得を訪ねて相語つたもの、文珠と普賢の化身とか、或は仙人とか、頗る神祕的に云ひ傳へられてゐる。故に句

も亦禪味をふくんで、庭の雪を掃いてその雪を忘るゝ筈なるかな、と物あれば影をとどめ、物去れば影散ず、といふ透徹玲瓏明鏡止水の如き寒山拾得の心境を詠歎したのである。

中々に心おかしき臘月哉

(文車集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に、「ふぐるま集」所載の馬指堂宛書翰

一樽被懸御心凌寒風辱奉存候。明日より御番之由御苦勞奉察候「中々に心おかしき臘月哉」御非番之間御尋可得芳慮候。折節對客及早筆候。頓首。酒堂も御手紙見申候

を掲げて元祿五年説とするにしたがふ。「臘月」は「師走」とよむ。又「つれく草」に

年の暮れはてと、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしゆく、春のいそぎにとり重ねて、催し行はるゝ様ぞいみじきや。云々。

とある如く、公私さまの行事共が、なか／＼に心おかしき師走なるかな、と自己は其渦の外に在りて、世間を見やりての面白さを詠歎したのである。

月花の愚に針たてん寒の入

(薦獅子)

元祿六年の「薦獅子」にあるので五年の作と見る。

「月花の愚」とは月花を愛する我執着心ともいふべきもので、寒の入には一般の人は三里の灸をする或は針治などの養生法を講ずる。しかし我は生來の煙霞癖から終歲東西南北に漂泊の旅をつゞける、その愚かさを益健かならしめんが爲めに、肉體への灸針ではなく、月花に心酔する我愚かさに針をたてよう、といふのである。

忘年書懷、素堂亭

節季候を雀のわらふ出立かな

(深川)

元禄六年の「深川」にある、素堂亭に忘年会を催して、節季候芭蕉、餅春嵐蘭、衣配會良、佛名洒堂、歳暮素堂、と分題の所作である。
 年の暮になると、赤い布で顔を覆ひ目ばかり出し、齒朶の葉を翳した笠をかぶつて、歌をうたひつゝ、戸毎に米餞を乞ひめぐるものを節季候といふ。
 軒の雀がその粉粧のもの／＼しいのを笑ふ節季候なるかな、とあるべきものを、律語の関係から上下交錯して、「出立かな」と詠歎したのである。

せつかれて年忘するきげんかな

(小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄五年説とするにしたがふ。
 みんなからやりませう／＼とせつかれて年忘の會をする、われ人ともによいきげんなるかな、と朗らかな氣分を詠歎したのである。

蛤の生るかひあれ。としの暮
 蛤もいける甲斐あり。としの暮

(薦獅子)

(陸奥千鳥)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄五年説とするにしたがふ。「芭蕉句選年考」に

或人曰、會良が甥何某と云者所持の眞蹟、自畫讀に、牒の上に蛤二つ書きて此句あり、

とある、いかにも迎春の用意らしい光景である。この年の暮に、病にも侵されず、友人門弟とは日夕相訪らひ、何の不足もなく、やがてまた新しき年を迎ふる。かゝる我が境涯こそまことに、蛤の生ける甲斐あれ、と我が幸運をよろこんだのである。「蛤の」は「かひ」に對する枕詞式の効果をもつ外に、榮螺、鮑など違つて何等特色のない平凡さを自己に擬する氣分もある。「蛤も」に對しては「あり」、「あれ」に對しては「甲斐こそ」と見るべきものである。

壬申十二月廿日即興

元禄五年

打よりて花入探れむめつばき

(句兄弟)

「句兄弟」に「降こむまゝの初雪の宿、彫棠」「目にたゝぬつまみ肴を引かへて、晋子」以下、黄山、桃隣、銀杏、と六人の歌仙がある。

五人が芭蕉庵を訪ひ寄つて一卷やることになつた、それでは發句を願ひますと云はれ、折から花活に梅と椿が挿してあつたので、諸子よ集まつて、梅椿をこの花入に探れ、そして郊外に梅を探つた氣になれ、といつた即興吟である。

元祿六年 癸酉 (五十歳)

雞旦

年々や猿に着せたる猿の面
元日や狙に着せたる狙の面

(翁草)

(類柑子)

晋風氏は「芭蕉句集定本」「大系本芭蕉一代集」には共に元祿六年として「新編芭蕉一代集」には發句の部に五年とし、書翰の部に六年としてある。許六の「俳諧問答」に

(前略)その後三月盡の日より卯月三四日まで、予が宅に入逗留し給ふ。晝夜俳諧を聞く。(中略)名人は危所に遊ぶ、俳諧かくの如し。仕損ずまじき心あくまで有、是下手の心にして上手の勝にあらず。我が當歳旦「としくや猿に着せたる猿の面」といふ句、全く仕損じの句なり。ふと歳旦に猿の面よかるべしと思ふ心ひとつにして、はり合たるなれば、仕損じの句なり。予が曰、名人の師の上にも仕損じ有や。答曰、每句有。予この一言を聞て、言下に大悟す(下略)

とある。許六の正式に入門したのは元祿五年八月であるから、其後三月盡は六年であり、即ち當歳旦もまた六年であることが知られる。「三冊子」に

此歳旦、師のいはく、人同じ處に止て、同じ處にとしく落入る事を悔ていひ捨たるとなり。

とある。「年々や」を自身「仕損じ」と云つてゐるので自信のなかつたことがうかゞはれる、故に其角は「類柑子」に「元日や」としたのであらう。原作のまゝでは季感がはつきりせぬが、「元日や」とす

れば鮮明になる、しかしまたそれだけ原作「年々や」とは感受がちがつて来る。さればこそ芭蕉は推敲も加へずに、仕損じの句として其まゝにして置いたのであらうから、「元日や」と改めることは所謂最良のひき倒しである。

新らしき年をむかへて、こゝに我が過ぎ來し方を顧ると、宛も猿に着せたる猿の面の如く、何等變化進境を認めざる年々やナア、と詠歎して「三冊子」に自ら云ふごとく、悔て云ひ捨てたのである。

菟蓐のさししみもすこし梅の花

(小文庫)

「小文庫」には「いかなる事にやありけむ、去來子へつかはすと有り。」

とあり、「芭蕉翁發句集」には「去來子の許へ亡き人の事など言ひ遣すとて」とありて、元祿六年の吟としてゐる。

「すこし」は「少し」か「凄し」か。「風俗文選」麻生の後序に、許六は「翁は菟蓐を好かれたり」と云ひ、「削りかけ」に支考は越人に對つて「菟蓐の白あへでもして靈供に供へ給へ」とあるので、芭蕉

は菟蓐好であつたことがわかる。故に端書に「亡人」の文字がなければ「少し」と見られ、「亡人」がありとすれば「凄し」と見られる。決定しがたいので二つに解して置く。

(一) 當地は今梅の季節である、そして例の好物の菟蓐のさししみも少しつゝ食膳に上る、と近況を報じたものと見る。

(二) 庭前に白き梅の花も、精進料理即ち菟蓐のさししみも、また凄寥の感がある、と故人を偲ぶ意を云ひ送つたことになる。自分は此解をとるが、猶未だ迷ふことは、「亡人」は芭蕉の方に屬するか、去來の方に屬するかのものである、元祿元年に死んだ去來の妹千子をしのんでの作と見るべきものか、この點は決定しがたい。

二月吉日とて是橘が剃髮入醫門を賀す

はつむまに狐のそりし頭哉

(末若葉)

「芭蕉翁發句集」に元祿六年としてゐる。

是橋は其角の僕でもあり門人でもあり、また其角の父東順に醫を學んだと見える。元祿六年其角が父東順の病を慰めんと選んだ「萩の露」に「名月や一昨日つくる酒の味」是吉とあり、元祿十年の「末若葉」に此句があり、更に同集に「白髯を製すとて、明髯のふはくになる火燧哉、是橋」とすつかり醫者になりすましてゐる。

成美の「隨齋諧話」に

この是吉といふは其角が僕なり、年々置かふる僕をいつも名つけてこれ吉といふ、さるはさまくの名をつけかへんもわづらはしとて、新古にかゝはら平常にたゞこれくと呼で埒明せしといへり、云々

とある。「狐の剃りし」は狐即ち是橋の剃りしとも、又是橋の頭を狐の剃りしとも兩様に解されるが、人を賀するにあたつて其人を狐に擬することは、謹慎な芭蕉としてはあるべくも思はれない、故に自分には狐に剃られた方と見る。

初午の日とめでたく、稻荷様が剃つて下さつた是橋の頭なるかな、と祝つて詠歎したのである。

悼 圖師 呂丸

當 歸 より あはれは 塚の 莖草

(笈日記)

呂丸は出羽の圖師左吉で、元祿二年芭蕉が其地に遊んだ時の三山案内者である。其後江戸の芭蕉庵に或は京都の支考の許に滞在してゐたが、やがて京都に客死した。其歿年月に就て、月日は二月二日と「笈日記」に明記されてゐるが、年は「俳諧年表」には元祿五年としてある、しかし芭蕉と支考は同伴して四年の冬に江戸に下り、五年春支考は奥州行脚をして、其夏京都に上つたのであるから、どうしても六年でなければならぬ。「芭蕉翁發句集」の元祿三年とするのも、「芭蕉句選年考」の四五年の間とするのも、共に「笈日記」の文中にある「かくて武の芭蕉庵に旅寢してしばしの秋を惜み、洛の桃花坊にかりねして春のやがてきたらんといふ事をまつ」を閑却したからの誤りである。晋風氏の「芭蕉句集定本」「大系本芭蕉一代集」には五年とあつたのを、「新編芭蕉一代集」に六年と改訂されたのに賛成する。又「古今抄」に支考は

追善は情を先にして平話のまゝに演べたらんこそ俳諧の實なれば、これらの句格を鑑にして、切字

の有無を論ぜざれとなり。當歸は當歸と訓じて、詩にも思郷の名類となせり。歸ると住むとの語對を見るべし。

と云つてゐる。當歸は和名に澤獨話といふ藥草で、「當に歸るべし」と訓むので、古來旅人に對して詩の材料として屢用ひられてゐる。

呂丸は己に幽冥其界を異にして終つた。今や旅中の人に對して言ふべき、詞の縁の當歸などよりも、一層あはれなるものは其墳のほとりに、さゝやかに咲く董なり、といふのである。支考は「すみれ」はそこに「住む」の縁語と見てゐる、それも一解ではあるが、たゞ董そのものだけでも哀れさは十分出てゐる。

露沾公にて

西行の庵もあらん花の庭

(泊船集)

「芭蕉翁發句集」に元祿六年とするにしたがふ。

露沾公は盤城平の城主内藤右京亮義泰(號風虎)の長男(一説次男)下野守義英で、貞享二年九月父の歿した時は三十一歳の壯齡であるのに、家督は弱齡の弟義孝をして嗣がしめ、爾來享保十八年九月十四日七十九歳で歿するまで、悠遊自適大名俳人の一大家として生涯を過した人である。庭すべてを花で占めてゐるかの如くであるから花の庭と云つたので、其庭に在れば身はさながらに芳野の山に遊ぶの感があり、あちらの花の蔭には、或は嘗て西行の住みし庵もあらん、と全く芳野そのものゝ如く強く感じた心象を云つたのである。

蝙蝠も出よ浮世の花に鳥

(西華集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿六年前とするにしたがふ。

蝙蝠は昔から鳥にして鳥にあらずと云はれ、また日中は潜伏して居て夜にならなければ出て來ない。それで、今世間は花の盛りであり、鳥は各その嬌音を弄んでゐる好季節であるから、蝙蝠も出て來て仲まに入れ、といふのである。

元祿六年

僧 專吟 餞別

つるの毛のくろき衣や花の雪
つるの毛の黒き衣や花の雲

(のほり鶴)

(芭蕉句選拾遺)

專吟は江戸の僧で、初め芭蕉に學び、のち其角に従つた。「芭蕉句選拾遺」に

杖頭に草鞋をかけて、笠の内に名をあらはす。元祿六とせ彌生の初、僧專吟武江の東深川の草扉を開て、既一步をはじめと書く。此僧常に風情を好み市を避て、年々斗擲行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣んとす。身は雲外の鶴にひとしく流に鶺鴒をすゝぎ、千尋の岡に翅をふるふて、野に伏雲に泊らん胸中の塵いさぎよし。予、葎の交を爲す事久し。今此別にのぞみて、ともに岸上に立て箱根山はるかに見やる。彼白雲のたはめる處こそ、旅愁の嶮難さかしきちまたなるべけれ。君かならず首をめぐらして見よ、われ又岸上に立んといひて袂をわかちぬ。といふ文章のあとに此句がある。

花は鬢鬢として雲の如く、その中を鶴の羽先の毛の如き黒き衣やナア、と文中の「身は雲外の鶴にひとしく」から連想して、專吟の旅姿を詠歎したのである。「花の雲」といへば光景が廣く見えるに反し「花の雪」では視界が狭められる感じがする「かの白雲のたはめるところ」などの續きから見ても、「雲」の方が正しいと思ふ。

聲よくば 諷ふものをさくらちる

(初便)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿六年説とするにしたがふ。

櫻花が燎亂として散りちる、それに對して、われ若し聲よくば、春を惜むの意の感懐をうたはんものを、といふので、聲が悪いからうたはぬ、といふ一齣が餘意として存してゐるのである。

肅山子のもとめ、晝は探雪なり。琴と笙と太鼓

と讃をのぞまれしに。

散花や鳥もふどろく琴の塵

七四八
(末若集)

「芭蕉翁發句集」に元祿六年とするにしたかふ。

肅山は伊豫松山の久松家の重臣である。「末若集」に此句のあとに、

みてひとつあそばして山の鳥をも驚かし給へ「左。青海や太鼓ゆるまる春の聲、素堂」右。けしか
らぬ桐の一葉や笙の聲、其角」

とある。「みて云々」の詞書は此句にも添ふものである。

花は繽紛としてちる、そして其間に飛び交はす鳥共も、この琴の、梁の塵を動かすが如き美妙なる音に驚く、といふので、それにつけて、「ひとつ遊ばして山の鳥をも驚かし給へ」と云つたのである。琴にかゝつた塵に鳥が驚いたのではない。

三 聖 人 圖

月花の是やまことの主達

(笈日記)

「笈日記」尾張部にある。晉風氏の「新編芭蕉一代集」發句の部に貞享元年説とあるのは明かに誤植で、文章の部に「花はさくら」所載の左の文をあげて、元祿六年作とあるのが正しい。

夫風流に心をとめて、其四季にともなふもの、濱の眞砂の盡せぬ詠ならめ。其情を述て其ものをあはれむはこと葉の聖也。されは文明のころ其道さかなりし聖たちの言葉、今の掟となりて其實なる事、今の人のすさむ事かたかるべし。されども風雅の流行は天地とともにうつりて、只つきぬを尊ぶべき也。さればかの宗祇、宗鑑、守武の壽像を求めて、此道の好士許六の筆勞をかり、我拙き一句をついで、道のたゞ萬古にさかんならんことをいのる而已。月花のこれや實のあるし達。

又「敏宮物語」には「貞徳、宗鑑、守武の畫像に、東藤子讚を乞けるに、何を季に何を題にむつかしの讚やと笑みたまひ、やがて書いてたびけり。その句其こと葉書」として

三翁は風雅の天工をうけ得て、心匠を萬歳につたふ、此かけに遊ばんもの、誰か俳言をあふがざらんや。

とある。「花は櫻」と何れを信すべきであらうか。とにかく、これら三人がやまことの月花のあるじ

達ナラン、と二人を賛美したのである。

あけぼのやまだ朔日にほとゝぎす
あけぼのやまだ紫にほとゝぎす

(芭蕉句選拾遺)

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元祿六年説とするにしたがふ。

(一) 東方稍曙の色を見せる頃、杜鵑が一聲鳴き過ぎた、まだ卯月朔日にはやくも時鳥を聞いた、と云ふのである。

(二) 「枕草子」に「春は曙。やう／＼白くなりゆく。山ぎは少し明りて、紫だちたる雲の細く棚引きたる」とあるが、今の曙の空が當にその如く、夏とは名のみで、空はまだ紫に見えて、時鳥が早くも夏を告げる、といふのである。自分は後の方が正しいと信ずる。

ほとゝぎす聲や横たふ水の上

(陸奥千鳥)

ほとゝぎす聲横たふ水の上
一。聲の江に。横たふやほとゝぎす
ほとゝぎす。横たふ聲や水の上

(藤の實)

(笈日記)

(翁草)

「芭蕉句選年考」に「元祿六年の吟にや」とある。

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に宮崎浩氏所藏、卯月廿九日附、荊口宛の書翰があり、「笈日記」には其後半のみがある。「新編芭蕉一代集」によれば、

(前略) 頃日は郭公盛に啼わたりて、人々吟詠草扉に音信侍しも、蜀君の何某も旅にて無常をとけたるところも申傳へたれば、猶亡人が旅懷草庵にしてうせたる事も一入悲しみの便りとなれば、ほとゝぎすの句も工案すまじき覺悟の處、杉風、曾良、水邊之ほとゝぎすとて更にすゝむるにまかせて與風存寄候句、「ほとゝぎす聲や横たふ水の上」聲横たふ敷「ほとゝぎす聲や横たふ水の上」と申候に又同じ心にて「一聲の江に横たふほとゝぎす」水光接天白露横江の句、横字句眼なるべしや。ふたつの作いづれにや、小生推敲難定處、水沼氏沾徳と云もの訪來れるに、かれ物定のはかせなれと、兩

句評を乞。沾曰、横江の句、文に對して考之時は句量尤いみじかるべけれど、江の字抜て水の上とくつろげたる句のほひよろしき方におもひ付べきの條申出候。兎角する内、山口素堂、原安適など詩歌のすきもの共入來りて、水上の究よろしきに定りて事やみぬ。させる事なき句ながら、白露横江と云奇文を味合て御覽可被下候。是又御懷しさのあまり書付申事に候。以上。

とあり、支考の「俳諧問答」には

此ほととぎすの句出ける時、予もあづまの方に居合せて、その折の文通に「ほととぎす聲横たふや水の上」「一聲の江に横たふやほととぎす」右兩句沾徳が判に寄て、水の上の句にきはめ侍ると言ひて、色紙送られたり。今に予が所持するもの也。予翁への返事に、沾徳といふもの一生眞の俳諧なし、かれが判覺束なし。沾は只江に横たふの方まされりと返事せし也。案するに、水の上の句幽玄には聞え侍れども、水の上はいらぬ詞なり。聲よこたふや水の上と、一言も残さずいひつめて、しかも水の上といろへたる事を沾徳はよろこべり。これ俗のよろこぶ所なり。江に横たふや、といふ處にいろ／＼のこゝろふくめたる事をしらす、中々俗の耳には落がたし。師名人たるによつて、一人の意に決し給はず、人にいはせて論をきはめ給ふ人也。予などにも言はせて極め給ふ事毎々これ

有、其外諸門人いづれも右の通也。他門の人にも云はせて句をきはめ給ふ事度々あり。しかれども外の句は判者の沙汰なし、此句にかぎりて、沾徳が別を乞ふと旁／＼ひろめ給ふ、是仔細なき事にはあるまじ。沾徳が判に極めたるといふ事を、後代までいはむ爲とかくはしるし給ふと見えたり。兩句甲乙はいづれともわきがたかりけれども、すぎ不數寄を論ずる時は、予は江に横たふのかた勝れたりと覺え侍る。いひつめずして心のあらはれ侍る事をこのめる故也。

とあり、又、許六、李由の「篇突」には

右兩句、甲乙自己にも分がたくや、沾徳の判にて水の上に極ると云事を廣めり、此事仔細あるべし。隨に江に横たふの方勝れり。李由許六が方へも其おり此事申贈られたり、其返答にも一聲の方すぐれりとは申遣し侍る。案するに、後代沾徳が判にて極めると云事を残したまふ故成べし。門人に對して句を定めたまふ事いくばくかあらむ、終に其判者の沙汰なし。勿論其極まらぬ句を廣めたまへる事もなし。右兩句共に並べたまへるは、自己にも一聲の方勝れりとおもへる成べし。此兩句察し見るに江に横たふの方先へ出たるべし。一聲の江に横たふやと云までは、たひらかにきこえて口にははらず、下のほととぎすと云所、舌頭にあたりはねかへりたるやう也。故に下五もじを引上げては

とゞぎす江に横たふや、とは作り見給ふ成べし。是にては五も七も七の間、に聲の字不足しける故に江の字を聲とは直りたるなるべし。下の水の上は、いろへむすびにて連続也。水の上はかくれたる所もなく、しかも水の上とつくしく色へたるに寄て、俗俳の耳にはよろこぶ所なり。水の上といひつめたる所を自己にもおとれりとはおもひながら、病のなき方を取得として水の上には極めたまふ成べし。されば爰に至て沾徳と云名を出したまへるに見所あり。

とあり、去來の「湖東問答」には

此二句沾徳が判にて水の上の方に極るよし、許六書けり。先師も人の評によりて句を定め給ふ事侍るや。答、此事あるべし、沾徳のみに限らず門人の評を聞いて句を定め給ふ事多し。又問、江に横たふ方勝 侍るとも、下の五文字舌頭にあたりてはね返るやうなりと云へり、下に時鳥と置き給へる句、或は野を横に、或は京にても京なつかしや、其外にもいか程も侍らん、唯此一句のみ先師の吟じ返し給へる、いかなる事にや。答、許六のいへる所定めて故あるべし、我西國に生れ舌だみ清濁わからず、聊か舌頭にあたる所を知らず。又野を横に馬引き向けよ時鳥、木がくれて茶摘も聞くや時鳥、の二句は上十二字の間にテニハよくまはり候、此一句はテニハ廻らずと云へる事も我

など不知處也。

とある。以上の各文を総合すると、初め(一)時鳥横聲たふや水の上、(二)時鳥聲や横たふ水の上、(三)一聲の江に横たふや時鳥、の三句を得て取捨に迷ひ、折から來訪した沾徳に相談した。沾徳は(一)の江の字を水の上とくつろげた所がよいとし、そこへ素堂、安適も來合せて共に(一)を賛成した、かくて「聲横たふや水の上」が確定義となつた。ところが其事を手紙で知つた許六は大に異議があつて、「聲横たふや水の上」は云ひつめて居て、しかも「水の上」とはいらぬ詞で、「江に横たふや」でいろ／＼の心がふくむのである、思ふに「一聲」の方が先きに出來たが、下の「時鳥」がはねかへるやうなので、「時鳥江に横たふや」としたが、それでは「聲」がなくなるので、更に「江」を「聲」としたのであらう、先師自身も「水の上」と云ひきつたところを不満足には思ひながら、下五の「時鳥」は舌頭にはねかへるといふ缺點があるので、先づ其病のない「水の上」に定めたので、それ故沾徳に判といふ責任を分擔させたのだ、といふのである。それに就て去來は、下五の「時鳥」が舌頭にあたるといふ缺點は認められぬ、他にも下五の「時鳥」がある、また此句テニハの廻らぬなどいふことも知らぬといふので「水の上」を批難しない。要するに沾徳、素堂、安適は共に(一)を佳とし、芭

蕉もそれを承認し、許六は下五にはねかへる缺點はあるが(三)を好むと云ひ、去來はたゞ、許六がいふところの(三)の缺點を知らぬ、と許六に反対しただけで、二句の優劣には言ひ及ばない、而して(二)は全然何れにも問題にされなかつたのである。先づ此三句を検討するに、

(一) 時鳥聲横たふや水の上、時鳥が水の上に聲を横たふやナア、との詠歎で、「水の上」に少しく説明に傾くうらみはあるが、文法上何の缺點もない。

(二) 時鳥聲や横たふ水の上、時鳥が水の上に聲をや横たふナラン、と想像に變ずるのが(一)との差で、其他は同じく、また文法上缺點がない。

(三) 一聲の江に横たふや時鳥、「横たふ」は他動詞で、他にしかするところの主格者を要する、故に「一聲の」からは絶対に「横たふや」とはなり得ない。即ち此句を文法上缺點ならしむるには「一聲を江に横たふや時鳥」一聲の江に横たはる時鳥の何れかでなければならぬのである。沾徳素堂、安適が(三)を否定したのは、文法上の缺點あるによるか、許六が(三)を好むといふのは文法上の缺點はあるが、猶「水の上」の説明よりはまされりとしてか、更に或はすべが全然文法論に立脚せずしてのただの好惡によるものか。

城主君、日光御代參勤めさせ給ふに扈從す岡田
氏にまうす

篠の露袴にかけし茂りかな (後の旅)

「芭蕉翁發句集」には元祿七年とし、晋風氏の「新編芭蕉一代集」にも元祿七年説とあるが、「芭蕉句選年考」に

按ずるに元祿の頃濃州大垣の城主は、戸田安女正氏定也、元祿六年四月七日、日光二十日御名代勤めらる、

とあるから、晋風氏の前著「芭蕉句集定本」の如く六年とすべきものであらう。

大垣の藩士岡田千川餞別の吟で、「牡丹の花を拜む廣場、千川」短夜も月は急がぬ形して、涼葉以下左柳、青山、此筋、遊糸、大舟、等の歌仙がある。

足下がお供して行かる、日光は、今や満山茂りこまやかである。それで、篠竹の露が袴にかゝる茂り

なるかな、との詠歎であるが、まだ其地に到らぬのに「かけし」と過去にしたのは何故か、或は已に其境を踏んだものとしての假定から過去にしたのであらうか。

許六が木曾路におもむく時

旅。人。の。こ。ろ。にも。似。よ。椎。の。花。
椎。の。花。の。心。にも。似。よ。木。曾。の。旅。

(續猿蓑)

(韻塞)

元祿六年五月六日許六が彦根に歸る時の送別で「韻塞」に

木曾路を経て舊里にかへる人は森川氏許六といふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、おのれが心をせめて物の實をしる事をよろこべり。今仕官おほやけの爲には、長劍を腰にはさみ、乗かけの後に鎗をもたせ、歩行若黨の黒き羽織のもすそは、風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず「椎の花の心にも似よ木曾の蠅」「うき人の旅にも習へ木曾の蠅」

の文があつて、許六の附記が

兩句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る。

とある。「續猿蓑」は全部芭蕉の選にのみなつたものでないことは明かで、此句なども「韻塞」のを初案と見、「續猿蓑」のを再案と見るよりは、むしろ後人が「續猿蓑」に入れる時に誤つたものと見るべきであらう。

「韻塞」のは、許六よ、今度の木曾路の旅は、公用の爲とて、長劍を腰に、鎗を立てさせ、若黨をつれて、殿めしい姿で行くにしても、其心は、何等これぞと目に立つものはないあの椎の花の心にも似よ、と姿はとにかく心は佗人であれかしとの希望である。

「續猿蓑」のは、椎の花に對つて、旅人の心に似よといふので、許六に對する氣分が出てゐない。或は假に、椎の花の頃の此旅行に於て、許六よ、佗人の旅の心にも似よ、と解し得るとしても、それは次の「うき人の」句と類想になつて、二句示す必要がない。旁此方は誤りと見る。

うき人の旅にも習へ木曾の蠅

(韻塞)

前句と同時の吟である。

蠅の群がる木曾路の旅枕に、許六よ、その心境をうき人の旅心にならへ、といふのであるが、蠅よりも椎の花の方が寂し味があつて優つてゐる。

弔初秋七日兩星、小町が歌

高水に星も旅寝や岩の上

(小文庫)

「小文庫」に

元禄六年文月七日の夜、風雲天にみち、白浪銀河の岸をひたして、烏鶺も橋杭をながし、一葉梶をふきをるけしき、二星も屋形をうしなふべし。今宵なを只に過さんも残おほしと、一燈かゝげ添る折ふし、遍正小町が歌を吟ずる人あり。是によつて此二首を探て、兩星をなぐさめむとす。

といふ文の末に、此句と杉風の、遍昭が歌「七夕にかさねばうとし絹合羽」の句がある。小町と遍昭の歌とは「後撰集」に

いその上といふ寺にまうで、日のくれにければ、夜明けてまかりかへらんとて、とゞまりて此寺に遍昭が待ると、人の告げればものいひ試みんとていひ侍りける「岩の上に旅寝をすればいと寒し苔のころもを我に貸さなん、小町」返し「世をそむく苔のころもはたゞ一重かさねばうとしいざふたりねん、遍昭」

とあるのをいふ。芭蕉の句は小町の歌の「旅寝」岩の上」をとり入れてゐるのである。

今宵の大風で天の川も浪はげしく、高水の爲に織女星も小町の如く、岩の上に旅寝をするやナア、と詠歎したのである。

悼松倉嵐蘭

秋風に折て悲しき桑の杖

(笈日記)

松倉甚左衛門、嵐蘭と號す、板倉家の臣、元祿六年八月廿七日歿、四十七歳。「笈日記」に芭蕉の金革を褥にしてあへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事十とせあまり九とせにや。この三とせ斗官を辭して岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとしていまだ世波にたゞよふ、日々風雲に座して、今年仲秋仲の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を曳、其歸るさより心地なやましようして終にいきたえぬ、おなじき廿七日の事にや、七十年の母に先立、七才の稚におもひを残す。いまだをしむべき齡の五十年にだにたらず。公の爲には腹をし切ても悔まじきうつはものゝ、はかなき秋風に吹しほれたる草のたもと、いかに露けくも口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに、母の恨、はらからのなげき、したしきかぎりは聞傳へて、偏に親ぞくの別にひとし。過つる睦月斗に稚子が手をとりにて、予が草庵に來り、かれに號得さすべきよしを乞。王我五才の眼ざしうるはしと、我の一字を摘て嵐我と名付、其よろこべる色今目のあたりをさらす。いける時むつまじからぬをだになくてぞ人はとしのばるゝ習、まして父のごとく子のごとく、手のごとく、足のごとく、年頃云なれむつびたる佛

の愁の袂にむすぼゝれて、枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはんとすれば胸ふさがりて、ただをしまづきにかゝりて夕の空にむかふのみ。として此句と次の句とがある。

秋風に桑の杖がはかなくも吹き折られて、ひたすら其杖をたのみとせし我ぞ悲しき、と哀傷の意をのべたのである。

九月三日詣墓

みしやその七日は墓の三日の月 (笈日記)

前句にある松倉嵐蘭の初七日に墓参しての句である。

嵐蘭の墓に詣でて、先月廿七日は嵐蘭はまだ現世の人で、彼は曉方の東の空に残んの月を三日の月とも見たらうが、その初七日の今日は嵐蘭はすでに泉下の佛で、我はこの墓所に於て、暮行く西空に三日の月を見しやナア、との詠歎である。疑問の「見しや」と混同せざらんことを要す。

東 順 傳

入 月 の 跡 は 机 の 四 隅 哉

(句兄弟)

榎本東順は其角の父で、元祿六年八月二十九日に歿した、芭蕉は其傳を記して、

老人東順は榎氏にして、其祖父堅田の農士竹氏と稱す。榎氏といふものは晋氏が母方によるものならし。ことし七十歳ふたとせの秋の月を病る枕のうへに詠めて、花鳥の情、露を悲しめる思ひ、限りの床のほとりまで神みだれず、終にさらしな句をかたみとして、大乘妙典のうてなに隠る。若かりし時醫を學んで常の産とし、本多何某のかうより俸錢を得て釜魚甌塵の愁すくなし。されども世路をいとひて、名聞の衣をやぶり杖を折て捨つ、既に六十年のはじめなり。市店を山居にかへて樂むところ筆をはなたず。机をさらぬ事十とせあまり、其筆のすさみ車にこぼるゝがごとし。湖上に生れて東野に終りをとる。是必大隱朝市の人なるべし。として終りに此句がある。

二十九日は月のない頃で、月の入つたあと即ち其人の亡き跡は、常に五車にこぼるゝばかりの筆のすさみをあたりにとりちらしてゐたのを、今はかたみに、空しき机の四隅なるかな、と詠歎したのである。

月 や その 鉢 の 木 の 日 の した 面

(翁 草)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿六年説とするにしたがふ。「もとの水」には端書が「古將監の古實を語りて」とある。「古將監」とは貞享二年八月に歿した能樂の名手寶生重友のことで、同じ道の沾圃とその故實を物語つたのである。「旅人なれば折からの冬、沾圃は水鳥に廻文のむらに來て、其角」と三物がある。

「鉢の木」は佐野源左衛門常世が、其陋居に最明寺時頼を宿して、松竹梅の鉢の木を伐り焚いてもてなした事を題材にした謡曲であり、「下面」はその能を演ずるシテが、舞臺に出る時の態度をいふので即ちそこところに故實がある。其鉢の木の故實を語りつゝあつた時、たま／＼月が東方に昇り初め

た。それで、あの月もやまた其態度が、古將監の鉢の木のした面の如くナラン、とシテの登場を月の昇ることに思ひよせて想像したのである。

良夜吟

夏かけて名月あつきすゝみ哉

(萩の露)

「萩の露」に元禄六年八月十八日、其角が父の病の看護のいとま、月見をした時の歌仙があつて、その次にこの句があるので、其年の名月の夜の吟なることが知られる。

夏から引きついで、この名月の夜にいたつても猶あつく、月見を兼ねてする納涼なるかな、と詠歎したのである。

深川の末、五本松といふ所に船をさして

川上とこの川下や月の友

(續猿蓑)

川上とこの川下と月の友

(泊船集)

元禄七年編の「續猿蓑」にある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄六年とするにしたがふ。五本松といふものは、小名木通大嶋に、五本の老松が水面に被さしのべて繁茂してゐた場所である。そこに舟を泛べてふと素堂と杉風とを思ひ起しての吟であるが、小名木川はどちらを上とし下とすべきものか、とにかく、五本松からは東方に素堂の庵があり、西方に杉風の深川の庵がある。わが月の友は、我と同じく月を打ち仰ぎて、この川上と川下とにゐるやナア、と詠歎したのである。

名月の夜やあもくくと茶白山 (射水川)
あもくくと名月の夜や茶白山 (さいつころ)

元禄十年の「射水川」にある。晋風氏は「新編芭蕉一代集」に元禄七年説とし、連句部に「さいつころ」より、「肌寒しとてかり着初る、立圃」の對吟歌仙をあげ、「立圃」は沾圃の改めて三世立圃となり

たるものなることを考證され、更に「但し年次は元禄六年か」と云つてゐる。沾圃と對吟であり、秋の句なることから推測して、「六年か」に左袒する。

(一)は、名月の夜や、と先づ大觀を叙し、其月光の下に茶白山が重々と見ゆる、といふのであり、(二)は、茶白山が重々と見える名月の夜やナア、と詠歎したのである。

十六夜はわづかに闇の初哉

(續猿蓑)

十六夜はとり分闇のはしめ哉

(韻塞(鄙懷紙))

元禄七年編の「續猿蓑」にあり、「芭蕉翁發句集」にも六年とある。芭蕉庵の觀月會で、「鄙懷紙」に「鶉船の垢をかゆる濫鮎、濁子」近道に鶏頭島をふみ付て、岱水」以下、依々、馬草、會良、涼葉、七吟の歌仙がある。

十五夜に満ちた月は、十六夜から極めて少しづつではあるが缺けて、同時に月の出も少しづつおくれる、即ち闇の初歩なるかな、と詠歎したのである。

悦堂和尚の隱室にまゐりて

香をのこす蘭帳蘭のやどり哉

(鹿子の渡)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄六年前とするにしたがふ。悦堂和尚とはいかなる人か知らぬが、其隱居所に招請されての挨拶の句である。よき人の居室を蘭室といふから、「蘭帳」も同じ意味で僧であるが故にかく云つたのであらう。

香を残す蘭帳、即ち和尚が隱退後の今日猶法績をとどめた御寺は、まことに蘭のやどりの、其花を取り去つても餘薫の残れるが如くなるかな、と和尚の住職時代の法績をたゞへたのである。

畫 讚

秋海棠西瓜の色に咲にけり

(正風彦根體)

晉風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄六年説とするにしたがふ。

秋海堂も西瓜も寛永年中に渡來したもので、それから六十年過ぎた元禄には一般に行き渡つてゐたらうが、しかしまだ若干の異國情緒をそれから味はひ得たらう。句は解を要するまでもなく可憐な花の色を形容したものである。

岱水亭

影まぢや菊の香のする豆腐ぐし

(杉丸太)

「芭蕉句選拾遺」に元禄六年とす。「影待」は月影祭の意であらうが、七月廿六日待の外に特にそんな風習があるかどうか知らぬ。

岱水の月待のもてなしに田樂が出た、折柄庭前には菊が咲き誇つてゐて、田樂の申までも菊の移り香がする、といふので、當夜の饗應の厚意を賞へたのである。

菊の花咲や石屋の石の間

(藤の實)

元禄七年の「藤の實」にあるので六年の作と見る。「翁草」には「八町堀にて」と端書がある。石屋の庭には石があらうこちらに置かれて、其間に菊の菊が咲いてゐる、といふたゞ「矚目のまゝ」の詠歎である。

雞頭や雁の來る時尙あかし

(續猿蓑)

元禄七年の「續猿蓑」九年出版の「初蟬」にある。又「泊船集」には「畫讚」とある。

これは葉雞頭で、雁來紅の名に負かず、雁の渡つて來る頃はさらに一層紅い。といふのである。

榎の實ちるむくの羽音や朝あらし

(笈日記)

榎の實ちるむくの羽音や初あらし

(芭蕉句選)

砂。榆。の。實。に。む。く。の。羽。音。や。初。暴。風。

(古今明題集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄六年説とするにしたがふ。

嵐がさつと渡つて、榎の實がはら／＼と散りこぼれる、其折から一群の椋鳥が羽音をたて、渡つて来る、田家の秋意が鮮かに描き出される、そのすべての矚目から把握し得た感情を、「や」と詠歎で締めくくつたのである。「朝」と云へば時間が鮮明になり、「初」と云へば季節が鮮明になり、互に一長がある。

老の名の有ともしらで四十雀

(續猿蓑)

「摩詰庵入日記」に十月九日附、許六宛書翰に

保生左太夫三吟に「老の名のありともしらで四十から」少將の尼の歌の餘情に候。素堂菊園に遊びて「菊の香や庭にきれたる沓の底」野坡と云ものゝ四吟に「金屏の松の古さよ冬籠り」猶廣く他見被成ましく候(以下略)

とある、このうち「素堂菊園」は次項の句で、元禄六年十月九日のことであるから、此句も亦六年たる事が明かである。

「少將の尼の歌」とは元禄二年の「少將の尼の話や」の條に云ふ通り、「おのが音のつらきわかれのありとだにおもひもしらで雞や鳴くらむ」の歌である。また人世四十を以て初老とする。

あの四十からは、四十から初老といふ名のあることも知らず無心で飛び舞つてゐる、といふので自己の生涯に就ての省察もふくんでゐる。

元禄辛(癸の誤也)酉之初冬九日素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る事は、その

比は花いまだめぐみもやらず、菊花ひらく時則重

陽といへるころより、かつは展重陽のためしな

きにしもあらねば、なを秋菊を詠じて人々をすゝ

められける事になりぬ。

菊の香や庭に切れたる履の底

七七四

(續猿蓑)

酉歳は元禄六年である。前の句下に引用した書翰の日附によると、其夜直ちに許六宛に認めたと見える。

「沓の底」は、重陽の宴などいふ語勢から唐めかしたので、實はたゞの緒のきれた下駄であらう。

菊は今を盛りに咲き誇つて芳香を放ちつゝあり、ふと見やると庭先に古下駄がころがつてある、と無頓着な素堂のあるじぶりを云つたのである。

神無月廿日ふか川にて即興

振賣の雁あはれ也ゑひす講

(炭俵)

元禄七年の「炭俵」に「降てはやすみ時雨する軒、野坡」番匠が椶の小節を引かねて、孤屋」片はけ山に月を見るかな、利牛」四吟の歌仙がある。即ち「炭俵」の選者たちがそろつて教授をうけたので

ある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に大橋新太郎氏所蔵の、廿二日附以笑宛書翰

追而申入候、此中歌遊方ゑびす講大せい客呼候へば、參候而見物致候様に申越候故、愚身が右の中

へ指出候てはいかに候へども、見物に來よと申候故、下心いかゞしく風與參候て一句「ふり賣の

雁哀なりゑびす講」右の句をいたしてかへり申候。とかく雁に成てもいろ／＼有、大ぜいに賞味せ

られよろこばす雁も有、ふり賣にせらるゝ雁もありと申事ばかり、又々あとより申承候。以上。

がある。

今日の惠比壽講に、定まつたお出入の商人でなく、隨時どこへでも商ふ所謂振賣商人のもつて來る雁は、物あはれなり、と振賣は幅のきかないことを云つたのであるが、書翰を見ると、其振賣の雁それが芭蕉自身をさしてゐることがわかる。

ゑびす講 醉賣に袴着せにける。

(續猿蓑)

ゑびす講 醉賣に袴着せにけり。

(泊船集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿六年前とするにしたがふ。前句と同じ時か、或は別の年か、とにかく無禮講の日とて店員も打ち興じて、いつも来る酢賣をとらへて袴をはかせてしまつた、といふのである。

新大橋初めてかゝりし時

有難やいたゞいて踏む橋の霜

(芭蕉句選)

新大橋は元祿六年十二月竣工開通したのである、此橋が出来て江東方面との交通が便利になり、市民がいかによろこんだかがこの句でわかる。あゝ有がたいことだ、御恩をいたゞいて今日この橋の霜を踏む、といふのである。

夜すがらや竹こほらするけさのしも

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿六年前とするにしたがふ。過去の「こほらせし」なれば、今朝のこの眞白な霜が、昨夜夜すがらにや竹を凍らせしナラン、と想像したものであるが、「こほらする」と現在格では、過去の昨夜を表すには不適當である。かく文法に破綻ある句が眞に芭蕉であらうか、「眞蹟集」の編者桃鏡の眼識に、無條件に服従するわけにはゆかぬ。

芹焼 やすそわの田井の初氷

(其 便)

元祿七年の「其便」にある。「鄙懐紙」に「こぞりて寒し卵産む雞、濁子」織下す絹をむしろにひろとりて、涼葉」と三吟の歌仙がある。

「芹焼」に就ては二説ある、其一是、先づ石を焼いて其上に芹を置き、更に何かで覆ふて、上から火氣を興へて、蒸焼にして柚酢と醬油で食す、といふのであるが、初氷の頃は芹はないから、この説はこの句にはあたらない、其二是「俚言集覽」に

鍋焼、鳧雁などの切身に、芹、葱、麩、蒲鉾、蓮根などのやうなものを入れて、醤油の汁にて、薄鍋にて煮たるものをしかいふ、又芹焼ともいふ。

とある、即ち鍋焼、芹焼ともに現今の寄鍋と同じものであつて、これならば季節が調和する。「すそわ」は裾回とも縁輪とも書いて、山裾の水氣のあるところの意であり、また「田井」はたゞ「田」と同じことで、「すそわの田井」は即ち山裾の小田の意である。

芹焼の料理が食膳にのぼつたので、今はもう山裾の小田の初水するころだ、と連想したのである。

寒夜の吟

瓶 　　わ　　る　　、　　夜　　の　　氷　　の　　ね　　さ　　め　　哉

(筑　藻)

「芭蕉句選拾遺」に元禄六年とす。

氷のために瓶が割れる音を聞く夜の寢覺なるかな、と嚴寒の夜を詠歎しての錯綜叙法である。

竹　　の　　讚

た　　わ　　み　　て　　は　　雪　　ま　　つ　　竹　　の　　け　　し　　さ　　か　　な

(笈日記)

「笈日記」嶋田の部にあり、又「三河小町」にもある。然るに「杉風句集」には此句を杉風としてあるのは誤りであらう。晋風氏は、この書讚が現に久保氏の所蔵たることをあげ、「新編芭蕉一代集」に元禄六年説としてゐる、自分はそれにしたがつて六年に置く。

降る前から用意して、撓んで雪を待つ、此畫中の竹の姿なるかな、と詠歎したのである。

范蠡が趙南の心をいへる山家集の題に習ふ、

一　　露　　も　　こ　　ぼ　　さ　　ぬ　　菊　　の　　氷　　か　　な

(續猿蓑)

元禄七年選の「續猿蓑」にある。

端書の「趙南」は假字で「ちやうなん」とあつたのを、筆耕の勝手にあて字をしたことから誤を生じ

たので、「山家集」のは「長男」の意である。この故事は范蠡が越王を補けて會稽の耻辱を雪がしめ、去て齊に往き、陶に居を定めて大に富み、人これを陶朱公と云つた。ところが次男が楚に行つて人を殺して囚はれたので、三男に金を持たせて釋放運動にやらうとすると、長男が、次男を救ふ爲めに兄を措いて三男をやるのは不當だと云ひ、母もそれに同意であつたので、それにまかせて長男を楚にやつた。長男は與へられた運動費を惜しんだ爲めに、次男は楚で刑死してしまひ、長男は空しく金を持ち歸つた。陶朱公が曰く、こんな事件は金を惜んではならない、長男は我が富を積む苦痛を見て知つてゐるから勢ひ吝になり、三男は富を積んでから生れたので其苦みを見知らぬ、だから三男なら首尾よく二男を救助し得たらう、と言つた、といふのである。

西行はその長男の財を惜む意を「捨てやらで命を終る人はみな千々の黄金をもちかへるなり」と詠んだので、芭蕉も其意にならつて詠んだのである。

寒菊の花は黄色で、それに置いた露が氷つて、さながら黄金のやうである、その黄金色の一露をもこぼさず握りしめてゐる、菊の氷なるかな、と范蠡の長男のあはれにも吝かなるのを、寒菊を假り來つて詠歎したのである。

寒 菊 や 粉^糖 の かゝる 白 の 端 (炭 俵)

元祿七年の「炭俵」にある。「寒菊隨筆」に「提て賣行はした大根、野坡」と對吟の歌仙四句不足の卷があつて、野坡は「右俳諧歌仙者翁在世(元祿六癸酉冬)於芭蕉庵興行也。先師不_レ適_レ意句多、故不_レ満韻終止畢」と記してゐる。

庭には寒菊が咲いて居り、其ほとりで米搗男が米をついてゐる、白のへりにほの白く粉糠がかゝる、といふので純然たる寫生句である。

大根引といふ事を
 鞍 壺 に 小 坊 主 乗 や 大 根 引 (炭 俵)
 鞍 壺 に 小 坊 主 の せ で 大 根 引 (陸奥千鳥)

元祿七年の「炭俵」にある。「去來抄」に、

風國曰、此句いかなる處か面白き。去來曰、吾子いま解しがたからん、只圖してしらるべし。たとへば花を圖するに、奇山幽谷、靈社古寺、禁闕等によらば其圖よからん、よき故に古來多し。斯のごとくの類は圖のあしきにはあらず、珍らしからざればとりはやさず、又圖となしてかたちこのもしからぬものあらむ。今珍しく本情のまゝなる圖あらば、是を畫となしてもよからむ、句となしてもよからむ。されば大根引の傍に、草食む馬の首うちさげたらむ鞍壺に、小坊のちよつこりと乗たる圖あらは古からんや、拙からんや、察し見らるべし。國が兄何某却て國よりも感動す。かれは俳諧をしらすといへども畫をよくする故也。

とある。また大根引といふ季語はこの句に始まると云ふ人もあるが、延寶七年才麿撰の「坂東太郎」に「大根引けりねりまの郡みよし野や、洞雨」とあるから、始めてではないが、珍らしい季題であつたのだ。

大根を引に畑へ出かける、行きは空馬の鞍壺に、子供がのつてゐる、それを詠歎したので、全くの田園風景である。

菜根を喫して終日丈夫に談話す

ものゝふの大根苦きはなし哉

(芭蕉句選拾遺)

ものゝふの大根辛きはなし哉

(一葉集)

「芭蕉句選拾遺」に元祿六年とし、

元六酉、玄虎子東武旅館に會の時の事也。此句にて一折龜毛所持、ワキは周竹にて三吟。

とあり、「金蘭集」に「一とをり行木枯の音、玄虎」歌枕そろはぬ紙をとちそへて、舟竹」の表六句がある。玄虎は藤堂氏、芭蕉の舊主の一族。

一座武士階級の俳席とて、其談話もすべて武張つたことばかりで、大根の辛きが如き話なるかな、と詠歎したのである。

金 屏 の 松 の 古 さ よ 冬 籠 (炭 俵)

金屏の松の古びや冬籠
金屏の松も古さよ冬籠

(笈日記)

(小文庫)

元祿七年の「炭俵」の素籠の序に、

此集を撰める孤屋、野坡、利牛らは常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき、心の泉をくみしりて十あまりな々の文字の野風をはげみあへる輩也。霜凍り冬どのよあれませる夜この二三子庵に待て、火桶にけし炭をおこす。庵主これに口をほどけ、宋人の手龜かぶららすといへる藥是ならんと、しのゝ析箸に燠あつのさゝやかなるを、堅にをき横になほしつゝ、「金屏の松の古さよ冬籠」と、舌よりまろびいづる聲のみたりが耳に入。さとくもうつるうのめ鷹のめども、是に魂のすはりたるけにや、これを思ひ立、はるの日のよつと出しより、秋の月にかしらかたむけつゝ、やゝ吟終り編なりて竟にあめつちの二まきにわかつとなん(下略)

とあり、又前出「老の名のありとも知らで四十雀」の句下に引用の許六宛の書翰によりて、元祿六年の作たることは明かであるが、「三冊子」に

此句はじめ「山を繪書て冬籠」也、後直し也。

とある、さすれば貞享元年の「屏風には冬を畫て冬籠」の再案といふことになる、よしそれから進展したとは云ひ、たゞ再案とばかりは見られない、よつて各年に分つてあげて置く。

冬籠りをして居る、其ほとりに松の畫の金屏風がある、金屏風と云つても眞新しいピカ／＼物ではなく、古色の落付きを見せたもので、それがいかにも冬籠といふ事と氣分がしつくり合致する、それを詠歎したのである。「古さ」は「新らしさ」と相對的になるだけ理智をふくみ、「古び」はただうち見やつただけのさまであるから其方がよく、また同じ詠歎でも「よ」よりは悠揚の感じを伴ふ「や」の方が此場合には適當である。

贈酒堂。湖水の磯を這出たる田螺一疋、蘆間の蟹

のはさみをおそれよ、牛にも馬にも踏るゝなかれ

難波津や田螺の蓋も冬ごもり

(市の庵)

近江膳所の濱田酒堂（珍夕、珍碩）は、元禄五年九月江戸に下りて芭蕉庵に滞在し、六年二月近江に歸り、その夏大阪に居を移したのである。

古歌の「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」とあるのを假りて、その難波津に梅ならで、田螺の蓋も亦冬籠をする、と大隱は市にかくるの意を以て、酒堂の卜居を賀したのである。

埋 火 や 壁 に は 客 の 影 ぼ う し

（續猿蓑）

元禄七年編の「續猿蓑」にあるので六年の吟と見る。

「一葉集」には「曲翠旅館」と端書があり、「芭蕉句選年考」には「杉風家藏眞蹟に、素堂が妹の身まかりける時、と前書あり」とあるが、ともにどれだけ信用し得らるゝか疑問である。

埋火がしてある、灯はいづれ行燈で、其灯口が客にむかつて開かれてあつて、丁度其影が壁にうつる様になる、いかにも埋火に適した佗びた夜の風情である。

仙 化 が 父 追 善

袖 の いろ よ ご れ て 寒 し こ い 鼠

（芭蕉句選拾遺）

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元禄六年説とするにしたがふ。

亡人を悼ますに、仙化其人に對しての弔慰の句である。即ち仙化の着物の袖が涙にぬれ汚れて、濃い鼠の色になつてゐるのが寒い、といふので、鼠の袖といふからには仙化は僧侶であつたのだらう。

鼠毛ねこみげ に つ づ み て ぬ く し 鳴 の 足

（續猿蓑）

元禄七年編の「續猿蓑」にある。

水邊の芝生に蹲つてゐる鴨を見ての吟であらう。其短い足を腹の毛に押しつゝんでゐるさまが、温かさうに見える、それで「ぬくし」と作者の感じをのべたのである。

生ながらひとつに氷る海鼠哉

(木曾の谿)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄六年説とするにしたがふ。「木曾の谿」に「ほどけば匂ふ寒菊のこも、岱水」兩吟十二句まで、以下杉風と岱水とで満尾せしめた歌仙がある。桶か笊にいくらかの海鼠が入れてある、それが生きたまゝで一かたまりに凍りついてゐる、他のものならばよしや凍つてもそんなことはない、そこで「かな」と詠歎したのである。

ふぐ汁や鯛もあるのに無分別

(芭蕉句選拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には俳句の部に元禄六年説とし、書翰部に貞享二年として、小林一三氏所藏、廿三日附琴風宛の

權之丞殿御出にて承候へば、此比は鮫多くとれはいかふぐの會にまぎれさん／＼の仕合、さうさ

う御やめ可被成候。とかくとうふなどがよく候。一句いたし進申候。「ふぐ汁や鯛もあるのに無分別」

書翰をあけてゐる、自分はその何れを正しとすべきかの考もないので、元禄六年説の方にしたがふ。魚の美味なものは鯛もあるのに、世人はまあ無分別にも食ふ河豚汁やナア、と詠歎したのである。

煤はきは己が棚つる大工かな

(炭俵)

元禄七年の「炭俵」にある。

平常はよその仕事で日を暮すが、今日の煤掃には己の家の棚をつる大工かな、と詠歎したのである。

うとまるゝ身は梶原か厄拂

(射水川)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿六年前とするにしたがふ。

「けぢく」といふ虫の名は梶原景時から起つたと云はれるほどに、景時はきははれ者であつた。厄拂は、悪魔を西の海へさらりと拂ひましょ、と云つて来る。それで、その厄拂に西の海へ追ひはらるゝ疎まれ者は、梶原の如きか、と詠歎したのである。

海ある所にたばねたる柴を繪書て

須磨の浦の年取ものや柴一杷

(茶草子)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿六年前とするにしたがふ。

海はどここの海とも、柴は何の爲めの柴ともわからぬ、それを、この一杷の柴は、須磨の浦人の、春を迎ふる用意の品やナア、と定めて詠歎したところが書讚のはたらきである。

有明も三十日にちかし餅の音

(笈日記)

月しろや三十日に近き餅の音

(芭蕉翁行狀記)

元祿七年編の「芭蕉翁行狀記」に「今は夢、師去年の歳暮に」として此句がある。「三冊子」に

此句は兼好「有とだに人にしられぬ身のほどやみそかにちかき有明の月」とある本歌を餘情にしての作なるべし。

とあり、「笈日記」にも此歌を附記してゐるが、所謂古歌取と見なくとも風情がある。

年の暮とて諸所に餅を搗く音がする。東の空には有明月がかゝつてゐて、しかもその細さがもう三十日に近い、といふので朝の七時頃の風情である。「月代や」は、月の將に出んとする時即ち曉方五時頃である。

盗人にあふた夜もあり年の暮

(續猿蓑)

元祿七年編の「續猿蓑」にある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に六年前とするにしたがふ。

年も暮になれば人心が険しくなるのは今も昔もかはらぬ。芭蕉もその災にあつたのだらう。

分別の底たゞきけり年の暮

(翁草)

元禄九年の「翁草」にある、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に六年説とするにしたがふ。年の暮のやりくり、人々がありたけの智慧をしぼつて、分別袋の底をたゞいてしまつた、といふ世相描寫である。

古法眼出どころあはれ年の暮

(みつのかほ)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄六年前とするにしたがふ。古法眼とは狩野元信のことで、元信は足利義政に仕へて狩野家を起したる畫の名手である。古法眼の筆はいづれ相當の家の藏幅である、それがこの歳晩に賣品となつて世に出ることは、其出所

を考へるとあはれである、といふこれ亦歳晩の世相である。

元禄七年 甲戌 (五十一歳)

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

(炭俵)

「芭蕉翁發句集」に元禄七年とし、晋風氏は「芭蕉句集定本」「新編芭蕉一代集」書翰の部には七年とし、同俳句の部及び「大系本芭蕉一代集」には六年としてゐる。元禄七年六月出版の「炭俵」にあるから、同年の作と見てよからう。

「去來抄」に

深川よりの文に、此句さま／＼の評あり、汝いかゞ聞侍るや。去來曰、都又は故郷の便ともあらず伊勢と侍るは、元日の式の今やうならぬに神代を思ひ出て、たより聞かばやと、道祖神のはや胸中をさわがし給ふかところ承り侍れと申。先師返事に、汝が聞所たがはず、今日神のかう／＼しきあ

たりを思ひ出て、慈鎮和尚の詞にたよりて、初の一字を吟じ、清淨のうるはしき蓬萊に結びたるなり。

とある、歌とは「この春は伊勢にしる人音つれてたよりうれしき初柑子かな、慈鎮」といふのである。

蓬萊其ものから便りを聞かうといふのでもなく、江戸に在つて伊勢からの第一通信を待たうといふのでもない。即ち慈鎮和尚の歌の「伊勢にしる人音づれて」とある如く、今年は伊勢に詣でて、眼前のこの蓬萊の如き清淨なる宮居を拜み、その初便りを聞かばや、と希ひ詠歎したので、即ち現實の蓬萊を見て、それに就て旅行の希望が念頭にひらめいたのである。

ひめが香にのつと日の出る山路かな

(炭俵)

これまた元禄七年の「炭俵」に、「處々に雉子の啼たつ、野坡」と對吟の歌仙がある。

梅は眞盛りに芳香をはなち、折から朝暾はさなが朱盆を釣りあける様に東天に昇る、この山路なるか

な、と春まだ寒きこの清淨境に立つての詠歎である。

ひめが香に追もどさるゝ寒さかな

(荒小田)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」元禄七年説とするにしたがふ。

或日はやゝ春めいたと思ふと、或日はまた雪ともまがふ白き梅花の香に、追ひもどさるゝ寒さなるかな、と訝えかへる意を詠歎したのである。

何某新八身まかりける一周忌に、ちゝ梅丸がも

とへ

梅が香にひかしの一字哀也

(笈日記)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄七年作とするにしたがふ。「笈日記」大垣の部に「文通」として此

句をあげ、更に

一歳の夢のごとくにして、猶佛立さらぬ歎のほど、おもひやりける斗に候、二月十三日、ばせ
梅丸老人、

といふ書簡がある。宛名に老人とあるのは、其親子の年齢を推測するたよりになる。
御子息がなくなられて一年になる、梅の花を見るにつけても、「去年の今ごろであつた」と、もう昔と
いはなければならぬと思ふことが歎かましい、といふのである。

竹内一枝軒にて

世にほへ梅花一枝のみそさゝる

(住吉物語)

「一葉集」には延寶天和年中としてゐるが、晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿七年説としてゐる
「住吉物語」は元祿八年頃と思はれるので、先づ晋風氏にしたがふ。

漢詩では、竹外一枝といへばそれが直ちに梅を意味する程に一般的である、この人も性が竹内で、梅

を愛するところから、竹外一枝に因んで號としたのだらう。又「莊子」逍遙遊編に「鶴鶉深林に巢く
ふも一枝に過ぎず」といふ語があつて、それにより「鶴鶉一枝」を分に安じ足る事を知るの意に
用ひる。

一枝上の鶴鶉の如く分に安じ足るを知り、梅花即ちの主じこそ世に句へ、と一枝軒の高風をたゞへた
のである。併しどうも晩年の作風とは思はれない。

此句を命令の句へと誤り解すると、梅花一枝の鶴鶉に對して命令する意になつて、
何の事だかわからなくなる。

圓角扇に讚を望て

前髪もまだ若草の句ひかな

(翁草)

元祿七年の「翁草」にある、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に七年説とするにしたがふ。

圓角に扇の讚をのぞまれての句で、晝は若衆姿の美少年でもあつたのだらう。前髪もまだ春の芳草の

如き匂ひなるかな、と詠歎したのである。

ね。は。ん。會。や。皺。手。合。す。る。珠。數。の。音。
灌。佛。や。皺。手。合。す。る。珠。數。の。音

(續猿蓑)

(三冊子)

元祿七年の「續猿蓑」にある。「三冊子」には

初は、「ねはん會」と聞えし、後なしかへられ侍るか。

とあり、即ち初案涅槃會、再案灌佛としてゐる。

善男善女が珠數の音さら／＼と皺手合はせて拜む、といふので、涅槃の方が適切である。

春。雨。や。蜂。の。巢。つ。た。ふ。屋。根。の。漏

(炭 俵)

元祿七年の「炭俵」にある。

春雨がしと／＼と降り出し、それが屋根を漏り、やがて軒下の蜂の巢につたはる、といふので、佗びた庵の質感である。

春。雨。や。簀。吹。き。か。へ。す。川。柳

(はたか麥)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿七年説とするにしたがふ。

春雨が降つて居り、川端の柳を吹いた餘り風が、漁夫か船頭かの着てゐる簀を吹きかへす、といふ體目吟である。

傘。に。押。わ。け。み。た。る。柳。か。な

(炭 俵)

元祿七年の「炭俵」にある。「鄙懷紙」に「若草青む塀の筑さし、濁子」朧月いまだ巨燵にすくみわて涼葉」以下、野坡、利牛、宗波、曾良、倍水の歌仙がある。

いづれ小糠雨であらう、さしてゐる傘でちよつと押し分けみたる柳かな、と詠歎したので、「みたる」は目で見る方ではなく「してみた」即ち動作に属する方である。

青柳の泥にしたゝる沙干かな (炭 俵)

元祿七年の「炭俵」にある。「泊船集」には「重三」と端書があつて、三月三日の沙干の句である。平常は水のある岸邊も、今日は、柳が直ちに泥にしだるゝ沙干なるかな、と潮が遠く引き去つたさまを詠歎したのである。

顔に似ぬ發句も出てよはつ櫻 (續猿蓑)

元祿七年編の「續猿蓑」にある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に石田露泣氏所藏、廿三日附、意水宛書翰に

(前略)此句去方の庭前にていたし候句也。數々云く有之候へ共筆紙にはつくしかたく候、キ面く以上。

とある。又「三冊子」には

此句は下の「さくら」いろく置かへ侍りて、ふと「初櫻」に當り、最「初」の位よろしとて究る也。

とある。

優しく麗はしい初櫻にくらべては、我が枯瘦した容貌はふさはしくない。そこで我が顔に似ぬ即ち初櫻そのものにつり合ふやうな發句も出でよ、と心の中に希ふたのである。

うへの、花見にまかり侍りしに、人々幕打さは

ぎものゝ音小うたの聲さまくになりけるかた

はらの松かげをたのみて。

四ツ五器のそろはぬ花見心哉 (炭 俵)

元祿七年の「炭俵」にある。「五器」はもと「食器」のあて字であるから、こゝでは「四つ五器」を、花見用の行厨諸具と解すべきものである。

上野の山には所々に、人々が小袖幕などを引きめぐらし、唄ひさわめく中に、ひとり松の蔭に、行厨などの用意はそらはぬながらも、悠然として春光を賞する我が花見心なるかな、と詠歎したのである。

花 見 に と さ す 船 遅 し 柳 原

(芭蕉翁全傳)

「芭蕉翁全傳」に「戌の春」として此句があり、更に「右玄虎子の旅館にて即興也、花見に六句ありと云」と附記がある。又「一葉集」には端書が「玄虎子が深川の旅舎を訪」とある。即ち藤堂玄虎を深川に訪ての吟であるが、それでは深川に住む芭蕉が深川に玄虎を訪ふにあつて、舟で柳原を過ぐるわけがない。此句は訪問以前上野の花見の折のもので、後訪問の折に前日の花見の句にあとをついだ

ものと見るべきである。

上野の花を見んとして、深川から舟により、大川を横切つて神田川に入り、柳原堤に沿うて行くと、悠々たる春の氣分にふさはしく、舟行も亦遅々たり、といふのである。

百 景 や 杉 の 木 の 間 に いろ み 草

(幽蘭集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」俳句秋の部には元祿六年前とあり、連句の部には「幽蘭集」によつて「箒を杖にわらふ山公家、浪化隣から祝へと籬の餅くれて、去來」の三物をあげて、元祿七年作としてある。この三人の一座は、七年閏五月落柿舎に於てのことであらうから、發句は其春の作と見るべきものであらう。又晋風氏は此句を秋の紅葉の部に收め、「一葉集」は春の櫻の部に收めてゐる。「いろみ草」が秋たる證歌は「藏玉集」に「秋もはやしぐるゝころのいろみ草ちらまくをしき山かぜぞ吹く」とあるが、また一方に「藻汐草」に「櫻の異名をいろみ草といふ」とある。畢竟同名であることの紛らはしさはあるが、此句が明らかに春季の意であることは、その脇及第三によつて證據たてられる、即

ちこれは櫻の句である。
杉の木の間くに、山ざくらが隠見する、その緑葉と花と交錯する色彩の變化が、げに百景やナア、と詠歎したのである。

畫 讚

物ほしや布袋のふくら月と花

(旅 袋)

物ほしや袋のうちの月と花

(一葉集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿七年説とするにしがふ。「一葉集」には端書が「布袋畫讚」とある。「花の故事」に廿三日附、杉風宛の書翰に

追つて申入候。其許より出来參候はん袋、あまりそこね申候、今一つあたらしくいたしたく候。大サ下地の通りにたのみ入候、則右飛脚に登せ申候。いづれにもよろしく頼入候。御内義様御せわにて候へ共たのみ入候。依て一句「物ほしや袋のうちの月と花」いかがおほし候や。當座間に合候間此

句雜にて御坐候。くはしき事追々可申入候。以上。

とある。これによれば「旅袋」「一葉集」の端書は、編者が後につけたとも見えるが、自分はむしろそれとは反對に、「旅袋」の「畫讚」とあるのが正しく、「一葉集」は句の内容から、それに「布袋」を補つたものであり、また「花の故事」の書翰は疑はしきものと見たい、それほど此句は布袋の畫讚として適當である。

かの布袋和尚の荷ふ大きな袋、その中にはさぞかし種々の寶があらう、寶といふても金銀珠玉ではない、われらがあこがるゝその中にある月と花とがほしい、といふのである。

烏 賊 賣 の 聲 ま ぎ ら は し 杜 宇 (韻 塞)

「芭蕉翁彼句集」に元祿七年とするにしたがふ。

時鳥が鳴きさうなものだと思つてゐた折から、夕河岸の烏賊賣が「イカア〜」と呼んで通つた、その聲が時鳥の音にまぎらほしい、といふのであるが、此時代の烏賊賣の呼聲は殊に時鳥の音に似てゐ

たものと察せられる。

贈桃隣新宅自畫自讚

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

(別座敷)

元祿七年の「別座敷」にある。桃隣天野藤太夫の新居を賀するために贈つたので牡丹に時鳥の圖である。

秋の露は清淨ではあるが幾分冷かな連想をもつ、然るに牡丹の花房内に湛へてゐる蜜は、寒からぬ露やナア、と詠歎したので、富貴草と異名ある牡丹を以て賀意を表したのである。

紫陽花や藪を小庭の別座舗

(別座敷)

元祿七年の「別座敷」の子珊の序に

麻の生平のひとへに衣打かけ、身がらく成行ほど、翁ちかく旅行思ひ立給へば、別屋に伴ひ、春は歸庵の事を打なげき、扱誹諧を尋けるに、翁、今思ふ體は浅き砂川をみるごとく、句の形付心ともにかろき也、其所に至りて意味有、と侍る。いづれも感入て、及ばずとも此ながれをしたふ折ふし、庭の夏草に發句を乞て、咄しながら歌仙終ぬ。是を巻頭として有合たる巻く、夏の云捨たるを取集め、門人の餞別をむすびて、伊賀の山家のつれづれに送り侍る。

として「よき雨あひに作る茶俵、子珊」朔日に鯛の子賣の聲聞て、杉風」以下、桃隣、八桑との歌仙がある。

先づ眼についた紫陽花の花をあげ、この家の庭はもの／＼しくも作りなさで、藪を共まゝ小庭の眺めに取入れたる別座敷なるかな、との詠歎を省略した十九字心切格である。

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす

(炭俵)

前掲の「別座敷」に、素龍齋全故の贈芭翁餞別辭といふ文があつて、其中に

(前略) 今年尙、後のさつきを郭公知ておこたる夜頃にや。初音聞侍らずとかこちて、此ころの愚詠を「村雨やかゝる蓬のまろねにもたへて待たるゝほとゝぎすかな」と吟じつれば、折のよきにやめでくつがへりてぬしも今宵句をさぐり得たりと「木隠て茶摘も聞や郭公」これなん佳境に遊びて奇正の間をあゆめる作とはしられけり。予も「青雲や舟ながしやるほとゝぎす」かうも有べきやなど、誹諧にくらす日もありけり。

とある。元祿七年は閏五月があつて、それ以前の月は勢ひ平年にくらべて季節かおくれる事になる。茶は晩春から夏にかけてつむものであるから、此年は四月になつても盛んにつんでゐたらう、また全故の文にもある如く、時鳥は四月に入つてもなか／＼鳴かなかつた。

或日たま／＼杜鵑一聲啼き過ぐるを聞き、折から茶をつみ居る者どもを見て、かの茶摘みも茶の木がくれに郭公をきくやナア、と詠歎したので、茶はさまで丈け高くないが密生してゐるので「木隠れて」といふ感じがある。

卯の花やくらしき柳の及ごし

(炭俵)

前掲「別座敷」の全故の饞別の續きに此句をあげて

の佳句は、柳暗花明なりといへる碧巖に似かよひ侍るを、「夏の小雨をいそぐ澤蟹」と卒爾に脇をさへづる折もありつゝ、いつか十日も泊り侍りけるも、今かう旅と旅とに袖をはなれ、遠岸蒼々たる川のほとりに獨たてり(中略)元祿七の年仲夏初の八日とある。

卯の花が眞白に咲きみちて、夜ながらほの明るいやうであり、そこに暗く茂つた夏柳が、あだかも卯の花の明るい方へ及び腰に、手をのばしてゐる如くに枝を垂れてゐる、といふのである。

人々川崎まで送りて饞別の句を云、其かへし。

麥の穂を便につかむ別かな
麥の穂を力につかむ別かな

(有磯海)

(陸奥千鳥)

陸奥千鳥に桃隣は

老いたるこのかみを心もとなくや思はれけん、故郷ゆかしく、又戊の五月八日、此度は西國にわた
り、長崎にしばし足をとどめて、唐土船の往來を見、聞馴れぬ人の詞を聞かんなど、遠き末をち
かひ、首途せられけるを、各々品川迄送り出で、二時ばかりの餘波、別るゝ時は互にうなづきて、
聲をあげぬ斗なりけり。駕籠の内より離別とて、扇を見れば。

と記して此句があり、「芭蕉翁行狀記」には、

元祿七年、翁の齡五十一、老のなかばの春を迎へ、雜煮の餅むまく覺へ、淺漬も齒にしみわたるが
れば、としの名残もちかづくにやと、門人正秀がもとへ文のはしに書て送給ふ。深川の桃梨散り過
れば、卯の花雲たちわたるまゝに、かんこ鳥の一聲二聲、そとろに物なつかしきかたもおほしとて
思ひ立旅心しきりにて、五月十一日江府そこくいとま乞して、乙州が宿せし京橋の家に腰かけ
いざとよ古郷がへりの道連せんなど、つねよりむつましくさそひ給へども、一日二日さはり有とて
やみぬ。名残おしけに見へてたちまどひ給ふ。弟子共追々にかけつけて、品川の驛にしたひなく。
として此句がある。首途の日が八日と十一日とちがひ、訣別の場所が品川と川崎とちがふ、これはど

ちらが正しいか決定しがたい。

神ならぬ身の知るよしもないが、この別れが江戸の人たちと永遠の別れになつてしまつたのだから、
所謂虫が知らすともいふか、うしろ髪をひかるゝ思ひがして、道の邊の麥の穂を便りにもとつかみな
がら、別離の辭を交はず別れなるかな、との詠歌になつたのである。

鶯や竹の子藪に老を鳴く

(別座敷)

「別座敷」に子珊は「道中より聞ゆ」と記し、「枯尾花」に其角は「四度結びつる深川の庵を又立出る
とて」と記してゐる、「枯尾花」のは文勢からさう云つたので、道中から云ひ送つたのが眞實であら
う。

此句を解して、鶯が竹の子藪に老いを鳴く、とする者は「や」と「が」とを同一視する亂視患者であ
る。しかしこの句は文法上破綻なしに兩様に解し得られるので、今左にその双方をあげ、賛否は讀者
自身の見識に委ねる。

(第一解)は「や」を感歎切字と見る。今や四度結べる深川の庵をあとにし、故郷へ向ふ我は、竹の子藪即ち生れたところに老を鳴く鶯やナア、と自己を譬喩するに鶯を以てしての詠歎である。

(第二解)は「や」を疑問云起と見る。我も今や四度結べる深川の庵を後にして、郷里に歸省せんとしつゝあるが、それと同じくかの鶯もや、また竹の子藪即ち生れ故郷に老を鳴くナラン、と老鶯の無心の鳴く音を、我が心境に比してさう感じ、想像した主観の句である。この兩解のうち自分は第二を採るものである。

箱根の關越て

目にかゝる時やことさら五月富士

(芭蕉翁行狀記)

七年歸省途次の吟で、「一葉集」には端書が、「さつき三十日の不二の思ひ出らるゝに」とある。それは「伊勢物語」に

富士の山を見ればさ月の晦日いと白うふれる、一時しらぬ山はふじのねいつとてか鹿の子まだらに雪

のふるらむ、業平

とあることや、また富士の雪の五月には消え初めて、所謂農男の形なども現はれることや、それらを思ひよせて、曇りがちの五月空に今日は幸ひに其巖峰の消え残る雪を仰ぎ得て、今は殊更に五月富士の目にかゝる時やナア、と詠歎したのである。

しどけなく道芝にやすらひて

どひみりとあふちや雨の花曇

(芭蕉翁行狀記)

これ亦七年歸省途中吟である。「どんみり」は「どんより」と同じ意。「樗」は「棟」とも書く、俗には梅檀とよぶ。

この句は、樗が雨の花曇りするのでもなく、雨の花曇りにどんみりとした樗や、といふでもない。即ち道芝に休んでふと上を見やると、梅檀の花が咲いて居り、空は五月の常とて曇つてゐる。それで櫻ばかりではなく、この樗もやまた花曇りをすらん、と想像したのであるが、櫻の花曇りはたゞ曇る

にとまると、梅檀の花曇は時節がらで降りを伴ふらしいので、「雨の花曇」と云つたのである。

駿河路や花橘も茶の匂ひ (炭俵)

元禄七年の「炭俵」にあり、又「別座敷」には「道中より聞ゆ」とある、これも歸省途上の吟である。

駿河は茶の産地として有名で、焙爐忙しく茶を製しつゝある。ふと見ると或家に橘の花が見える。由來橘の花は香の強いものであるが、それもこゝでは押されて茶の匂ひがする、といふのである。

さみだれや蠶煩ふ桑の畑 (續猿蓑)

五月雨や蠶煩ふ桑ばたけ (韻塞)

五月雨や蠶煩ふ桑のはた (小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄五年説としてあるが、支考の「十論爲辯抄」に

或時故翁の物語に、此程白氏文集を見て、老鶯と云ひ、病蠶と云へる此詞のおもしろければ、「鶯や

竹の子藪に老を鳴く」「五月雨や蠶わつらふ桑の畑」斯く此二句を作り侍りしが(下略)

とあつて、「竹の子藪」と同じく七年の作と見られる。

「小文庫」「泊船集」に「はた」とあり、「畑、端」何れかにまよふ、また「續猿蓑」「韻塞」「陸奥千鳥」「爲

辯抄」は何れも明かに「畑」である。桑畑に蠶が煩ふといふことはあり得べくもない。與へられた桑を食むこともせず、葉の端の方に蠶が病にかゝつて居る、と見るのがよいと思ふ。

五月雨や雲吹落す大井川 (芭蕉翁行狀記)

五月雨の雲吹落せ大井川 (笈日記)

五月雨の空吹落せ大井川 (有磯海(眞蹟集))

これまたこの旅中駿河嶋田での吟で、「芭蕉翁行狀記」には
嶋田は塚本氏杉本氏などいひて久敷音信馴れし方あればとて、おぼつかなき五月の雲をはらす。
とあり、「真蹟」に

五月の雨風頻りに落ちて、大井川水出ければ、嶋田にとゞめられて、如舟、如竹など云ふ人のもと
にありて（こゝに此句と次の句、如舟の句、芭蕉の脇句あり）元祿七、五月雨にふりこめられて、
あるじのもてなしに心動きて、いさゝか筆を取る事になん。
とある。

(一)は五月雨が降つて居り、濁流滔々と流るゝ大井川が黒雲を吹き落す、と水勢のすさまじさを云
つたことになる。

(二)濁流滔々と流るゝ大井川よ、五月雨の黒雲を吹き落せ、と晴天になることを希つて、川に命令
したことになる。

(三)は二と同じで、たゞ「雲」が「空」となつてゐる。

以上を三つを比較するに、川留めに遭つた旅人芭蕉の心情としては(二)が最も適切である。

ちさは未だ青葉ながらに。茄子汁
菫はまだ青葉ながらや。茄子汁

(笈日記)(真蹟集)

(芭蕉發句集)

前句と同時の吟である。

菫は夏季になると花をもつ、其ちさはまだ花をもたず青葉のまゝでありながらに、はや珍らしくも茄
子汁をすゝめられた、と茄子汁を賞したのである。こゝでは菫の青葉のまゝなるところに詠歎したこ
とになつて、茄子汁は少しも賞されて居ない。此場合初茄子汁を賞する前句の方がよい。

いぬの夏荷兮亭

世を旅にしるかく小田の行戻り

(ゆすりもの)

元祿八年の「ゆすりもの」にあり、「笈日記」には

元祿七年

元祿七年前の五月なるべし、尾張の國に入て、舊交の人々に對す。
とある。「陸奥千鳥」には「行々て尾州荷分が宅に汗を入」とある。
我はいつも世を旅寐に暮して、あだかも農夫が代かく小田の如くに、あちらからこちらへ、こちらからあちらへと行きつ戻りつしてゐる、そしてまた今度も會ふことが出來た、といふのである。

閑居をおもひ立ける人のもとに行て

涼。し。さ。は。さ。し。圖。に。見。ゆ。る。住。居。哉

(笈日記)

涼。し。さ。は。さ。し。圖。に。も。知。る。住。居。哉

(春草の日記)

涼。し。さ。を。飛。彈。の。た。く。み。が。指。圖。哉

(陸奥千鳥)

「笈日記」に前句に續いてこの句があり、「春草の日記」には端書が「野水亭にて」とあり、「陸奥千鳥」には端書が「尾州野水新宅」とある、即ち初案と再案で、七年歸省途中名古屋の岡田野水の宅での吟である。

この涼しさは、さすがに塵外に遁れんとする主人の指圖に、それと見ゆる住居なるかな、と新亭を賀したのである。第二の「にも知る」は理智が匂ひ、第三のは「涼しさを」と「たくみ」の間に掛け調になるので、句もまたたくみ過ぎて卒直さが無い。

隠士山田氏の亭にとどめられて

水雞啼と人のいへばや佐屋泊

(笈日記)

「笈日記」に「苗の雫を舟になげ込、露川」朝風に向ふ合羽を吹きたてゝ、素覽」以下三吟の半歌仙があり、後日其あとを支考、左次、巴丈三吟で完成した歌仙がある。また「有磯海」には端書が「露川がともがらさやまで道おくりして共にかりねす」とある。佐屋は尾張海部郡、伊勢の國境近いところ、名古屋の澤露川と川田素覽がそこまで送つて來たのである。

佐屋の山田氏方に立寄つたら、主人が「こゝは水雞をきくによいところだ」と云へばや、我も同伴者もそれを聞く氣になつて佐屋泊りすらん、と云ふので、然らざりせば、こゝには泊らで其まゝに過て

しまふのであつたのに、と山田氏の好意を謝する意がふくまれてゐる。即ち「云へばや」は「云つたから」ではなく、「云へばにや」と疑問又は想像の意を云起す辭であることに注意を要する。

東武吟行のころ美濃路より李由が許へ文のをと

つれに

ひるがほに晝寝せうもの床の山

(韻 寒)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とあるが、李由と交渉を持て以來、東武行の美濃路に於ける夏期は、七年の外にはないはずで、即ち歸省の途次、美濃の國から、近江平田の遍照寺に送つた句である。

「床の山」又は「鳥籠の山」とも書く、彦根の東方にある。「床」と晝寝、晝寝と晝顔はともに連想から連想をひき起した作意である。

今我は美濃路に在るが、やがて盛夏の頃は其地を訪れて、足下と共に床の山の松籟を聞き、いざや川

の清流を愛でつゝ、晝顔の咲くほとりの樹下に晝寝せうものを、といふので、それを思へば一日も猶永き心地がするといふ餘意をふくんでゐる。それは「もの」の下に、反轉する意の「を」があるだが、「の」の響きのうちに没入省略されてゐるからである。

雪 芝 亭

涼 しさや直に野松の枝の形

(笈日記)

「笈日記」伊賀の部にある、「蕉翁全傳」にも「元祿七戌のとし初の五月廿九日、尾張の方よりいがの國に歸り、閏五月十一日雪芝宅歌仙二卷」として此句があり、また「芭蕉翁發句集」には端書が、「雪芝が庭に松を植うるを見て」とある。雪芝は名は保俊、通稱廣岡七郎右衛門、上野町會所役人であつた。雪芝が庭に植ゑられた松を見て、野に在りしものながら、其まゝ直ぐに庭に移しても、こゝにふさはしき枝の形の涼しさやナア、と松の形を賞し兼ねて庭前の涼味を賞したのである。

猿 雖 宅 に て

柴 つけし馬のもどりや田植樽
柴 つけし馬のもどりや田植酒

(蕉翁全傳)

(一葉集)

「蕉翁全傳」元祿七年の條につづいてある。

猿雖は、伊賀上野の人、通稱内神屋惣七郎、後には意専と號し、東麓庵、西麓庵は芭蕉の命名による姓に就ては牧野望東氏の年表、大西一外氏の年表、岩本梓石氏の俳諧辭典には「築山氏」とし、更に伊藤松宇氏は著者に書を寄せて

猿雖の苗字は築山が正しき様に被存候、其證左に

芭蕉門古人眞蹟中所載(粟津文庫)

「頃日やあとさきしらず花に蝶、猿雖」土芳消息一通、猿雖短冊一枚、伊賀上野住人、猿雖曾孫築山桐雨寄附。

これによつて「築山」説を採られ。樋口功氏の校訂芭蕉翁全傳頭註には「窪田氏」とし、勝峰晋風氏も

著者に書を寄せて

猿雖の姓に就ては小生も決しかね候ひしが、數年前伊賀上野に赴き調査候處、「窪田氏」と認めたる古記録を見てそれに従ひ居り候、御承知の如く古人は父方母方の姓を兩方ながら使ひ居るためか、る疑問に逢着致し候、其角の如き母の姓で通したる人も御坐候へ共、自筆の記録にあり候方が先づよろしきかと愚考仕り候

と「窪田」説を採つてゐる。案ずるに、外孫は姓の異なるものあるのは普通であるから、ただ「曾孫」とあるだけの事では、築山桐雨の曾祖父を築山猿雖とは斷定來出ない。さりとて古來さう云つてゐるからはそれを否定も出来ない、そこで、安井小酒氏の蕉門名家集の如く「築山氏又は窪田氏」として置くのが無難であらう。何れにしても「一葉集」の端書「藏田氏の亭」は誤寫である。

残念ながら「田植樽」といふものに就て全然智識がないので解釋の下しようがない。「田植酒」も不熟な語であるが、田植初、植終りの祝ひの酒、或は田植中の勞を慰する用途と見るべきであらう。その田植酒を、町へ柴をつけて來た馬の戻り荷やナア、と詠歎したので、此句は上野の町へ村方から出て來た馬の背にある酒樽を見ての作であらう。

門人槐之道に

我に似な二つにわれし眞桑瓜

(初 蟬)

「蕉翁全傳」元祿七年の條に前句につづいて「難波の之道訪ひし時」とある。

之道は芭蕉に心酔してその作風の模仿をのみ志してゐたのだらう、それでそこにある瓜を譬に引用して、俗にいふ通り眞桑瓜を二つに割つたやうに我に似るな、と個性に眼ざむべきことを論したのである。或はまた我が東西南北に漂泊することを眞似るなとみてもよい。

一般に此句の上部を「われにな」と讀んで少しも怪しまないのはふしぎである。上一段活用の「似る着る、見る」等の動詞は、禁止「な」と合する時に「にな、きな、みな」とはなり得ない、これは「似な」と書いてあつても「にるな」と讀むべきであつて、「似」は動詞の本体即ち「にる」である。

朝露によごれて涼し瓜の土。

(續猿蓑)

朝露によごれて涼し瓜の泥。

(笈日記)

元祿七年の「續猿蓑」にあり、八年の「笈日記」には支考が「去年の夏なるべし、去來別墅にありて」と記してゐる。「三冊子」には

此句は、「瓜の土」とはじめあり、涼しきといふに活たる所を見て、泥とはなしかへられ侍るか。とある。

瓜の泥が朝露にぬれてゐて涼しい、とただ見たまゝであるが、いかにも夏の朝の涼味掬すべきものがある。

瓜の皮むいたところや。蓮臺野

(笈日記)

瓜の皮むいたところか。蓮臺野

(芭蕉句選)

「笈日記」に前の句に續いて、「人々つどひゐて、瓜の名所なむあまたいひ出たる中に」として此句が

ある。

蓮臺野は京都市の北部船岡山の下で、古く墓地として、またその近郊は甜瓜の名所として知られてゐる。

蓮臺野はあらゆる人々が、一切世上の煩惱の皮を剥き去る、即ち眞の空に歸する場所やナア、と墓地と瓜との連想からの所産である。

柳　こ　り　片　荷　は　涼　し　初　眞　桑　　（市の庵）

元祿七年の「市の庵」に「閏五月廿二日落柿舍亂吟」として此句があり、「間引捨たる道中の稗、酒堂」「村雀里より岡に出ありきて、去來」以下、支考、文章、素牛の歌仙がある。

肩の振分荷の一方は旅中必須の用具、一方は誰からか贈られた初眞桑で、やがて涼しい樹蔭でもあつたら、憩つて剥かうと思ひつゝ歩をはこぶ、それが涼しい、といふのである。或は天秤で荷ふと見る人もあるが、それでは「柳こり」ではあるまい、また初眞桑だから数も多くはない。

夕　顔　に　か　ん　へ　う　む　い　て　遊　び　け　り　　（有磯海）

元祿八年の「有磯海」にある。

夕顔棚の下でその家人が干瓢をむいてゐる、芭蕉もそれに交つて興に任せてむいてみる、その人々は、覺東ない手きわに庖丁をはこぶ芭蕉に、微笑を禁じ得なかつたであらう、そしてまた芭蕉もほゝ笑んで、この一句を口ずさみながら庖丁を措いたであらう。

六　月　や　峰　に　雲　置　あ　ら　し　山　　（句兄弟）

元祿七年八月編の「句兄弟」にあり、また路通の「芭蕉翁行狀記」に

江上木曾塚の庵はわすれがたき所なりとて、宇治伏見の里をへて立いられける。膳所松本のあたりにはむつまじき方あまたなれば、心よけにとどまり給へども、六月の照日いと照そひて、宵々の

蚊の聲もしきりなるにあきて、嵯峨野の方に赴き、おかしき人の遊園などかりて、逍遙せられける。として此句がある。

頃しも水無月で、嵐山は花にあらず紅葉にあらず、滴らんずる翠巒に、雲煙模糊として搖曳する、といふのである。

小倉ノ山院

松杉をほめてや風のかをる音

(笈日記)

これまた同じころの作とすべきであらう。「一葉集」には「小倉山常寂寺にて」と端書がある。「笈日記」の「山院」は「二尊院」の意であらう、さすれば二町ほど隔つてゐるが、先づその邊一體の氣分と見るべきものである。涼しい風が梢に音をたて、吹く、あれは蓋しこのあたりの松杉のたゞすまひを褒めてにやあらん、と想像したのである。

野明亭

すゞしさを繪にうつしけり嵯峨の竹

(泊船集)

「芭蕉翁發句集」に元祿七年とある。

嵯峨は竹林で名高いところで、その門人野明の宅での吟である。

萬竿の琅玕は、涼しさそのものを直ちに象徴して書き爲し了した、と自己がさながら畫中にあるが如き氣分をうたつたのである。

野明亭

清瀧の水汲よせてとてころてん

(笈日記)

清瀧の水汲ませせてや心太

(泊船集)

これ亦前句と同時の吟たることが明かである。「泊船集」には
とありしは野明に引さきすてさせ給ふ、笈日記に「水汲みよせて」といふはあやまりなるべし。
と附記があり、更にそれに就て「芭蕉句選年考」には

芭蕉の引き裂き捨てさせたるは「大井川浪に塵なし夏の月」の句にして「白菊の目に立て見る塵も
なし」の句に紛らはしとの事也（中略）清きをほめて塵なき事を云る所、清瀧、白菊にこそ紛
らはしけれ、波にちり込む青松葉に、水汲よせて心太の紛らはしき事侍らんや。

とある。いかにもその通りで、捨てよと云つたのは此句ではなく、後出の「大井川」の句で、「泊船
集」は聞き誤りであらう。しかし句は「泊船集」に云ふところが「笈日記」にあるよりは優つてゐる
「笈日記」のは、清瀧の水を汲みよせて心太を冷やす、とだけの平面描寫であるに反し「泊船集」の
は、清瀧の水を汲ませてや、この心太はかく冷やかならん、と心太を口にしての想像で、そこに感情
のひらめきが出てゐる。

大井川浪に塵なし夏の月

（笈日記）

清瀧や波にちり込む青松葉
清瀧や波に塵なき夏の月

（同）

（俳諧問答）

「笈日記」十月九日（元祿七年）の條に

服用の後、支考にむきて、此事は去來にもかたり置きけるが、此度嵯峨にてし侍る、大井川のほと
句おぼえ侍るかと思されしを、あと答へて「大井川波に塵なし夏の月」と吟じ申ければ、その句園
女が白菊の塵にまぎらはし、是もなき跡の妄執とおもへば、なしかへ侍るとして「清瀧や波にちり込
青松葉」

とあり、「去來抄」には

「清瀧や波にちりこむ青松葉」先師難波の病床に予を召して曰く、頃日園女が方にて「白菊や目に
立て見る塵もなし」と作す、過ぎし頃の句に似たれば、清瀧の句に案じかへたり。初の草稿野明が
方にやあらん、取りて破るべしとなり。然れどもはや集々に載せ侍れば捨つるに及ばず。
とあり、「俳諧問答」には

「清瀧や波に塵なき夏の月」白菊や目にたてゝ見る塵もなし」右兩句、塵なきといふ事、後にむつかしとて、波に散込む青松葉とは案じかへられたりと聞ゆ。退て案じみるに、此塵、志の趣ける所同じさまなり、故にあんじかへられたるとはみえたり。(下略)

とあり、「三冊子」には
「清瀧や浪にちり込青松葉」此句はじめは「大井川浪にちりなし夏の月」と有、その女が方にての白菊のちりにまぎらはしとて、なしかへられ侍る也。

以上を綜合すると「大井川浪に塵なし」を初案と傳ふる者は支考、去來、土芳、「清瀧や浪に塵なき」を初案と傳ふるは許六で、改作は四人共に「清瀧や浪に散込む青松葉」なることを認めてゐる、然るに「花屋日記」には六日の部に

(前略) 去來を近く召して、先の頃野明が方に残り置き侍りし大井に吟行せし句「大堰川波に塵なし夏の月」此句あまり景色過ぎたれど、大井川の夏氣色いひかなへたりと思ひ居たりしが、清瀧にて「清瀧や波にちり込む青松葉」と作りて、事柄は變りたれど同案なりと人のいはむも如何なれば大井川の句は捨て侍らんと汝に申したり、然るに頃日園女に招かれて「白菊の眼にたてゝ見る塵も

なし」と吟じたり、是又同案に似て句の道筋同じ、それ故前の二句を一向に捨侍りて、白菊の句を残り置き侍らんとおもふなり、汝が意如何、(以下略)

とあつて「青松葉」の句までも捨てんとした如くに見られる。併し「花屋日記」は信用出来ぬ書であるから、暫く措いて「青松葉」は芭蕉に存置の意志ありたるものと認定する。

(一)は、夏の月皎々として、大井川の浪に一點の塵なし、といふのであり(二)は、先づ場所を「清瀧や」と定めて、青松葉が波に散りこむ、といふのであり(三)は、波に塵なき夏の月かな、の省略格と見るべきものである。而して(一)(二)と「白菊」とは「塵なし」といふところに同案の嫌ひはあるが、「青松葉」と「白菊」は別吟として存在するに何の支障もない、「花屋日記」は此點に於てだけでも怪しむべき書である。

納涼

さゝ波や風の薫の相柏子

(笈日記)

元祿八年の「笈日記」に「去年の夏又このほとりに遊吟して、遊刀亭にあそぶとて、納涼二句」としてこの句及び次の「湖や」がある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に四年説とするは誤植で、同氏の前著「大系本芭蕉一代集」の七年とするか正しい。遊刀は膳所の能太夫である。湖上に激澗たるあの小波はや、風の薫るその相柏子ナラン、といふので、あるじが能の太夫であるから其方面の術語をとり入れたのである。

湖や あつさをおしむ雲の峰

(笈日記)

前の句と同時の吟である。

「湖や」と先づ湖水に對しつゝあることを示し、そこにむく／＼と聳えたつあの入道雲が、夜に入つても今獨暑さを惜む、といふのである。

田家

飯あふぐかゝが馳走や夕涼み

(笈日記)

元祿八年の「木枯」及「笈日記」にある、「笈日記」には前の「湖や」に續いて「曲翠亭にあそぶとて田家といへる題を置て」として此句があり、そのあとに七年所作の「ひやし物」の句があるので、晋風氏の「新編芭蕉一代集」の四年説とするをとらず、「芭蕉句選年考」の七年とするに左袒する、曲翠は初め曲水と號し、菅沼定常、通稱を外記と云ひ、膳所の藩士である。客は縁側に出て田面を渡つて來る涼風にひたつてゐる、女房は炊きたての熱い飯を氣の毒がつて、盥團扇でばさ／＼と櫃の飯をあふぐ、それを噂が馳走やナア、と詠歎したので、いかにも田家といふ課題にふさはしい。

夏の夜や崩て明て冷し物

(續猿蓑)

「笈日記」に前の句につづいてあり、「是に今宵の賦を加へて、後猿蓑のに入集す、爰にしるさず」と

あり、「續猿蓑」にある支考の今宵賦は

今宵六月十六日のそら水にかよひ、月は東方の亂山にかゝけて、衣裳に湖水の秋をふくむ。されば今宵の遊び、はじめより尊卑をくばらねど、しばし酌でみだらす。人そこしに涼みふして、野を思ひ山をおもふ。たまかたりなせる人さへ、さらに人を興せしめんとにあらねば、あながちに辯のたくみをもとめず。唯萍の水にしたがひ、水の魚をすましむるたとへにぞ侍りける。阿叟は深川の草庵に四年の春秋をかさねて、ことしはみな月さつきのあはひを渡りて、伊賀の山中に父母の古墳をともらひ、洛の嵯峨山に旅寐して加茂祇園の涼みにたよはす。かくてや此山に秋をまたれけむと思ふに、さすが湖水の納涼もわすれがたくて、また三四里の暑を凌て、爰に草鞋の鶴をとどむ。今宵は菅沼氏をあるじとして、僧あり俗あり、俗にして僧に似たるあり。その交のあはきものは、砂川の岸に小松をひたせるがごとし。深からねばすごからず、かつ味なうして人にあかる、なし。幾年なつかしかりし人くくの、さしむきてわするるに似たれど、おのづからよるこべる色人の顔にかびて、おぼへず雞啼て月もかたぶきけるや。まして魂祭る比は阿叟も古さとの方へと心ざし申されしを、支考は伊勢の方に往ところ求て、時雨の比はむかへなむなどもおもふなり。しから

ば湖の水鳥のやがてはらくに立わかれて、いつか此あそびにおなじからむ。去年の今宵は夢のごとく、明年はいまだきたらず。今宵の興宴何ぞあからさまならむ。そぞろに酔てねぶるものあらば罰盃の數に水をのまさむとたはふれあひぬ。

として此句があり、「露ははらりと蓮の椽先、曲翠」鶯はいつそのほどに音を入れて、臥高以下、惟然支考の歌仙がある。

先づ「夏の夜や」と全幅を云ひ、水に冷して置いた料理の材料がいつしか崩れて、そして夜がほのほのと明けた、と徹夜の宴のさまを抒べたのである。

元禄七年六月二十一日大津木節庵にて

秋 ち か き 心 の 寄 や 四 疊 半 (鳥の道)

木節は醫師で姓を望月と云つた。「しどろにふせる撫子の露、木節」一月残る夜ふりの火影打消て、惟然起ると澤に下る白さぎ、支考の歌仙がある。

俗にも土用なかばに秋風が吹く、といふ通り、夏の暑が極まると、そのうちに自ら秋といふ感じがひらめく、その同じ憶ひを懐く四人が、四疊半の一室に會して、一椀の苦茗に涼しさを味ふ、それを詠歎したのである。

皿鉢もほのかに闇の宵涼み (其便)

元祿七年の「其便」にある。

水無月の二十日ごろ、月はまだ出ぬ宵の闇、心合ふ友どちの三四人、わざと灯も置かて納涼がてらの酒宴であらう、皿や鉢がほのかにそれと見らるゝ、といふので涼味が溢れてゐる。

なまぐさし小なぎが上の鮠の腸 (笈日記)

晋風氏の「芭蕉句集定本」及「大系本芭蕉一代集」には元祿六年とし、「新編芭蕉一代集」には五年説

としてあるが、八年の「笈日記」に

去年の夏、阿叟の桃花坊におはす時、人々よりぬて物語し侍るに、支考が集つくらば、なにがしの桐火桶に似せて侍らん。たとへば「梅が香にのつと日の出る山路かな」なまぐさし小なぎが上の鮠の腸「梅が香の朝日は餘寒なるべし。小なぎの鮠のわたは残暑なるべし。是を一體の趣意と註し候はんと申たれば、阿叟もいとよしとは申されし也。

とあるので、「芭蕉句選年考」の如く七年の吟と見るのが妥當であらう。「こなぎ」は「水葵」と書き、水田、小沼などに生じ、晩夏初秋にかけて「フィヤシンス」に似たる紫色の小さき花を開く。

水田か沼に小なぎが花を咲かせて居り、その上に鮠の腸のかゝつてゐるのが腥い、といふので、いかにも支考の云ふ通り秋の暑さを思はせる。

七夕や秋をさだむるはじめの夜 (有磯海)
七夕や秋をさだむる夜のはじめ (笈日記)

元祿八年の、「有磯海」「笈日記」にある「笈日記」には端書が「草庵」とあり、「泊船集」には「野童亭」とある。野童は院の御所に奉仕し京郡住の人である、よつて此句を七年と見る。秋立つてもまだ暑く、七夕の聲をきけばさすがに秋といふ感じが起る、そこで、七夕はや秋をさだむる初の夜ナラン、とひそかに想像したのである。

道ほそし相撲とり草の花の露

(笈日記)

元祿八年の「笈日記」湖南の部に「武の深川に有しが、去年の秋文月の始、ふたゝび舊草に歸りて」とある。即ち七年七月近江での吟である。

藁をも「角力取花」といふが、秋路傍などにある禾本科の植物、一尺ほどの高さで、小さき穂を併べるものをもまた「角力取草」といふ。

三年ぶりで粟津の庵に歸つて見ると、角力取草などがあちらこちらに生へて、その花に可憐な露の玉をつらね、道を狭めてゐる、といふので、陶淵明の三徑就荒、松菊猶存と同工異曲の作意である。

大津の木節亭にあそぶとて

ひやくと壁をふまへて晝寝哉

(笈日記)

「笈日記」に

此句はいかにきゝ侍らんと申されしを、是もたゞ残暑とて承り候へ。かならず蚊屋の釣手など手にからまりながら、思ふべき事を思ひ居ける人ならん、と申侍れば、此謎は支考にとかれ侍るとて、わらひてのみはてぬるかし。

と附記しあり、路通の「芭蕉翁行狀記」には

玉祭といふ文月十日も過て、しきりに父母のむかしもおもはるゝにや、殊は此秋は氣短に身の骨もとがりぬれば、桃尻のみせむかたなきなどうち笑ひ、又伊賀の方へ心ざし、道すがらなれば此かへるさにも粟津の庵に立より、しばらくやすらひ給。残暑の心を。として此句がある。

「晝寝」は今では夏の季語としてゐるが、この代にはさうは見えてゐないので、「冷か」を季語としてゐるのである。

秋まだ暑さの全くしりぞかぬころ、壁に足を押しつけて、ひややかさを感得しつゝする晝寝なるかなと詠歎したのである。

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛鼓をかまへて能

する處を畫て、舞臺の壁にかけたり。まことに

生前のたはぶれ、などかこのあそびに殊ならん

や。かの髑髏を枕として終に夢うつゝをわかつた

ざるも、只この生前をしめさるゝものなり。

稻妻やかほのところが薄の穂

(續猿蓑)

元祿八年の「續猿蓑」にあり、また「芭蕉翁行狀記」に「丹野が好めるにまかせて、骸骨の繪讀に骨

相觀の心を前に書て」とある。大津の能太夫本間丹野のために骸骨の圖に題したのである。

笛に鼓に興ずる歡樂も、達觀すればたゞ骸骨の所作であつて、生前の戯れはみなそれに同じく、美人の膝を枕とするは即ち骸骨の膝を枕することである。而して人は闇中に、鼻先に薄の穂が迫つてゐるのも知らずにゐるが、稻妻がさつとさせば初めてその薄の穂を知り得る、即ち電光一閃一頓悟、かくて人世の無常なることがはつきりと認識し得られる、といふのである。

甲戌の夏、大津に侍りしをこのかみのもとより消

息せられれば、舊里に歸りて盆會をいとむとて

家。は。み。な。杖。に。し。ら。髮。の。墓。參。
一。家。は。み。な。白。髮。に。杖。や。墓。參。り。
家。は。み。な。杖。に。白。髮。や。墓。參。

(續猿蓑)

(芭蕉翁行狀記)

(宇陀法師)

我が東西南北の旅寝をつゞける間に、舊里の一門は何れも白髮の老となつてしまつた。今日は一家打

ちそろつて杖をひき白髪頭をならべて墓参りをする、といふのであるが、後句の方は、今日の墓参りに、一家がみな杖をひいたりまたは白髪頭やナア、と詠歎したことになるので、前句より一層感慨深きものになる。

尼壽貞が身まかりけるときよて

數ならぬ身となおもひそ玉祭り

(有磯海)

壽貞尼に就ては、嘗て芭蕉の生家松尾家に召仕はれたものと云ひ傳へられてゐる。またたゞそれだけではなく芭蕉と性の關係があつたのだといふ人もある。「芭蕉翁眞跡集」に六月三日附、猪兵衛宛書翰の一節に

理兵へ細工無之時分せめて煩不申様に御氣を可被付候。右之通壽貞にも御申聞かせ可被下候。おふう夏かけて無事に候哉、様子具に御申越可被成候。

とあり、又元祿七年かと思はるゝ六月八日附、猪兵衛宛の書翰

壽貞無仕合もの、まさ、おふう、同じく不仕合とかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候へ共急便に候間、此狀一所に御覽被下候様に頼存候。萬事御肝煎御精出しの段々先書にも申來、扱々辱誠のふしぎの縁にて此御人頼置候もか様に可有端と被存候。何事もく夢まぼろしの世界一言理くつは無之候。ともかくも能様に御はからひ可被成候。理兵へもうろたへ可申候間、とくと氣をしづめさせ取亂し不申様に御しめし可被成候。以上。

とある、壽貞の訃報に接しての返信らしい。又大阪で再び起つ能はざるを知り、支考をして筆をとらしめたといふ遺言狀のうちに

伊兵衛に申候。當年は壽貞事に付、還々御骨折面談に御禮と存候所無是非事に候。残り候二人之者共十方を失ひうろたへ可申候。好齋老など御相談被成可然了簡可有候。

とある。以上を綜合して、芭蕉の念頭に壽貞なるものが或る印象を残してゐる事、それはひいて其遺子たちにまで及んだ事、壽貞は五月頃死んだ事、猪兵衛といふ者が壽貞一家の世話をした事、其猪兵衛に七月歸省の際會見しなかつた事、がわかるが、其然らしめた原因は永久の疑問である。

汝壽貞よ、今この魂祭りせらるゝにあたつて、ゆめく自己を數ならぬものと思ひ下すなよ、と亡き

魂に對つてよびかけたのである。

冬瓜 や た が い に か ほ る 顔 の 形

(西華集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿六年説としてあるが、「西華集」に

この句は伊賀に居給へる時の作なり、是には老女に逢ひて、などいへる題もありやと申されしが。とあり、「一葉集」には「故人に逢て」と端書がある。老女を壽貞尼とでも見れば、壽貞尼死後の七年秋歸國の時ではないが、しかし六年の秋は在江戸で伊賀には居らなかつた、故に自分は七年と見る。

「冬瓜」は「とうぐわ」とも「かもり」ともいふ。

久しぶりて會つて見ると、額の皺、頭の白髪、お互に顔の形がまるでちがつてしまつた、といふので「冬瓜や」と上五に据ゑたのは、西瓜や甜瓜のごとく美しくなく、白い粉のふいたところや、四角ばつたところがいかにも野趣があるからであらう。

稻妻 や 闇 の 方 ゆ く 五 位 の 聲

(續猿蓑)

「蕉翁全傳」七年の條に「文月の頃、猿雖宅に土芳と二人稻妻の題にて」とある。

眞闇の空中に一闪の稻妻がサト走つた、と思ふその刹那に、ギヤア〜と五位鶯が鳴き行く、といふので、いかにも畫では表現出来ない秋の夜の淋しい氣分が描き出されてゐる。

玄虎子の宅

風色 や し ど ろ に 植 る 庭 の 萩

(蕉翁全傳)

風色 や し ど ろ に 植 し 庭 の 萩

(芭蕉翁發句集)

「蕉翁全傳」七年七月の條にある。「一葉集」に端書が「藤堂玄虎子の庭なかばに作りしを見て」とあり、「三冊子」には

この句、ある方の庭を見ての句也。「風吹く」とも一たび有、「風色や」とも云り。度々吟じていはく

「色」といふ字も過たるやうなれども、「色」といふ方に先すべしと也。
とある。藤堂玄虎はこの時國詰で、其庭の半ば就つた時訪問したものどみえる。
半ば作つた庭に萩がしどろに植ゑてあつて、それに風がさつと吹き渡る、といふのであるが「風吹く
や」でも感じが十分に出ないので、「風色や」とした、しかし「色」の字がちと過ぎる様に思はれたが
しかたがなく先づそれにして置く、と云つてゐるのだからさまで自信ある作とも見えない。

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

(蕉翁全傳)

「蕉翁全傳」七年の條に「八月七日望翠宅にて歌仙」とある。

交野望翠亭あたりは一帶に古き佛が残つてゐて、そして累々たる紅果の枝重げに垂れてゐぬ家は一軒
もない、と田家秋色の囑目吟である。

なに喰て小家は秋の柳蔭

(茶草子)

元祿十二年の「茶草子」にある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿七年説とするにしたがふ。
五葉六葉散り初めた柳の樹蔭に、この小家は何をたつきのしろとして暮すことぞ、といふのである。

名月に麓の霧や田のくもり

(續猿蓑)

名月に麓の霧が田のくもり

(篇突)

「蕉翁全傳」七年の條に「新庵の月見」として次の句と共に三句をあげ、

此三句、庵を見するとて門人たれかれ多く招かれし時と也。此庵赤坂にありて無名庵といふ(近頃
庵を舊地の東白舌翁の別墅に移され、再形庵といふ)三日月の記、口傳。
とある。

名の夜の月は皓々と照り輝いて居り、新庵から見下せば田面は打ちくもりて、麓路は一面の霧やナア
と詠歎したのである。後句はそれを「霧か」と疑ふ意になる、前句の方がよい。

名	名	名
月	月	月
の	や	の
花	花	花
か	か	か
と	と	と
見	見	見
え	え	え
て	て	て
綿	綿	綿
畑	畑	畑

(續猿蓑)
(有磯海)
(芭蕉句選)

「蕉翁全傳」にある新庵月見の第二句である。

このころは綿が莢から眞白に食み出して、それがあだかも花の如く見られるのである。

(一)は、花かと見えて名月の下の綿畑が白し、といふべきを省略と錯綜とを兼ねたのである。

(二)は先づ天空の月光を云ひ、綿畑が花かと見えて白し、の省略及錯綜である。

(三)は、名月の綿畑が眞白で、花かとはかり思はるゝ、の省略及錯綜である。

今宵誰吉野の月も十六里 (笈日記)

「蕉翁全傳」にある新庵月見の第三句である。

吉野の月もこゝ伊賀上野からは十六里距つてゐるが、今宵誰人が其吉野にこの清光を賞しつゝあるならん、と軽く疑つたのである。

目にかゝる雲やしばしのわたり鳥 (芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」には元禄七年とし、晋風氏の「新編芭蕉一代集」には考證の部にある。

はじめは雲かと思はれた渡り鳥の一群が、碧瑠璃の秋天をだん／＼こちらへ飛んで来る、それを仰いでゐると、あれも渡り鳥かと目につくまことの雲やナア、と詠歎したのである。

朝な／＼手習すゝむきり／＼す (摩詰庵入日記)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元禄七年説とするにしたがふ。

「きりくす」即ち「こほろぎ」は秋の夜になれば「つづれさせ」と鳴くと云はれてゐるが、それは女にむかつてのことで、男には朝なく鳴いて、手習ひをすゝめる、といふのである。

伊勢の斗徒に山家をとはれて

蕎麥はまだ花でもてなす山路かな

(續猿蓑)

「笈日記」七年九月二日の條に、支考は此句に就て

支考はいせの國より斗徒をいざなひて、伊賀の山中におもむく。是は難波津の抖擻の後、かならず伊賀にもむかへんと也。三日の夜かしこにいたる。草庵のもうけもいとどころさびて。

と誌して居り、また「蕉翁全傳」には

其とし秋洛の惟然、伊勢より支考斗徒、熱田より白鴻來る(支考斗徒は九月三日なり)其ころとして此句がある。

折角訪ねて来てくれても、山家のもてなしはせい／＼手打蕎麥位のものである。ところがそれもまだ

花のまゝでもてなしにする山路かな、と詠歎して、反つて庵には何のまうけもないことを云つたのである。

行秋や手をひろげたる栗の毬

(續猿蓑)

「笈日記」にあつて、これ亦前句と同じく九月二日の吟である。

此句は兩様に解し得る。

(一) 先づ「行秋や」と時節を云つて小段とし、更に第二の小段に、樹梢に手をひろげたる栗の毬かな、と詠歎省略の十九字心切格である。

(二) 梢の笑み栗を見て、あれは行秋がや手をひろげたるナラン、と行秋を人格化しての想像である。

由來自分がかゝる場合に、まづ(一)式の解を試みて、それが解し得られざる時に(二)式を採ることにする。然るに此句は(一)で完全に解し得るが故にそれを採る。

菊花の讚

折ふしは酢になる菊のさかな哉

(泊船集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿七年説とするにしたがふ。

菊は花の隠逸なるものとして詩人に賞され、或は菊合など、歌人にもめでられる、そしてまだ折ふしは酢和にもなる菊のさかなかな、と平民的なところを詠歎したのである。

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

(木 枯)

白露もこぼさぬ萩のうねりかな

(小文庫)

白露もこぼれぬ萩のうねりかな

(栞 集)

晋風氏は「芭蕉句集定本」「大系本芭蕉一代集」「新編芭蕉一代集」共に元祿四年説としてゐるが、「芭蕉

全傳」七年の條に「其とし伊賀にて名残の畫讚は」として「白露も」の句をあけてあり、また元祿十三年芭蕉七回追善「三上吟」に

「しら露もこぼさぬ萩のうねり哉」とからびたる有ましを繪さんしてたゞびける、七とせ先のいき顔を見ぬ世の友におもひなして、畫心のしほめるさまや比巴の花」專吟。

とある、七年前といへば即ち元祿七年にあたる、伊賀に於ける畫讚と、專吟の畫讚とは別物ではあらうが、六年或は七年と見るが妥當であらう。更に、春でも畫讚には當季ならぬ句を題することがあるから、まづ七年と見て置く。

花にも葉にも白露をさへへて、それをこぼさぬ萩の枝組のうねりかな、と詠歎したのである。「白露も」は理智をふくむ。また「こぼれぬ」の方が自然ではあるが、時代精神として「こぼさぬ」と有情化したところが、此句の作意である。

新葉の出そめて早き時雨かな

(蕉翁全傳)

「蕉翁全傳」七年の條に「猿雖宅」とある。此行伊賀を立つたのは九月八日で、此句はその直前であるから、これは秋の時雨である。

農家も九月に入れば稲もこき新藁も出る、やがてまだ冬ならぬにはやくも来る時雨かな、と詠歎したのである。

ひ。い。と。啼。尻。聲。か。な。し。夜。の。鹿。 (笈日記)

び。い。と。啼。く。尻。聲。悲。し。夜。の。鹿。 (陸奥千鳥)

ひ。い。と。啼。く。尻。聲。寒。し。夜。の。鹿。 (芭蕉句選)

支考は「笈日記」七年九月八日の條に、此句の前に

難波津の旅行、この日にさだまりたる事は、奈良の舊都の重陽をかけんとなり。人々のおくりむかへいとむつかしとて、朝霧をこめて旅立出るに、阿叟のこのかみもおくりみ給ひて、かねて引わかれたる身の、此後はあはじくとこそあきらめつるに、たがひにおとろへ行程は、別もあさましう

おぼゆるとて、供せられつるもの共に、介抱の事などかへすくたのみで、うしろ影の見ゆるかぎりはる給ひぬ。その日はかならず奈良までといそぎて、笠置より河舟のにりて錢司といふ所を過るに、山の腰すべて蜜柑の畑なり。されば先の夜ならん、「山はみな蜜柑の色の黄になりて」と承し句は、まさしく此所にこそ候へと申ければ、あはれ吾腸を見せてけるよとて、阿叟も見つゝわらひ申されし。是は老杜が詩に、青は蜂鬚の過たるをおしみ、黄は橘柑の來るを見る、といへる和漢の風情さらに殊ならねば、かさぎの峰は誠におしむべき秋の名残なり。船をあがりて一二里がほどに日をくらしして、さる澤のほとりに宿をさだむるに、はい入て宵のほどをまどろむ。されば曲翠子の大路の行にいざなふべきよし、しいて申されしが、かゝる衰老のむつかしさを、旅にてしり給はぬゆへなるべしと、みづからも口おしきやうに申されしが、まして今年は殊の外によはりたまへり、その夜すぐれて月もあきらかに、鹿も聲々にみだれてあはれなれば、月の三更なる頃かの池のほとりに吟行す。

と記してゐる。又「芭蕉翁真蹟集」に九月十日附、杉風宛の書簡

夏より七月迄の御狀尤遲速御座候へ共、段々無相違相達し候。久々伊賀に逗留故便りも不致候。無

心元被存候。愈御無事に御勤、御家内相替事無御座候哉、承度存候。おしめ祝言當月中にて可有御座と推量申候。定て御取込可被成候。定て首尾能相調可申と御左右待入候。

拙者先は無事に長の夏を暮し、漸々秋立候て頃日夜寒の比に移候。いかにも秋冬の間無恙暮し可申様に覺候間、少も御氣遣被成まじく候。追付參宮心がけ候故、先大坂へむけ可申、去ル八日に伊賀ヲ出候て、重陽の日南都を立、則其幕大阪へ至候て、酒堂方に旅宿假に足をとどめ候。名月は伊賀にて申見候。發句は重て可懸御目候。「菊の香やならは古き佛達」菊の香やならは幾世の男ふり」
「びいと啼尻聲悲し夜の鹿」いまだ句體難定候。他見被成まじく候。追付爰元逗留之句共可懸御目候。早々御狀御こし可被成候。其元兩替町か、するが町酒店にて稻寺や十兵へと申もの、爰元伊丹屋長兵へ店にて候間、早々御左右承度候。子珊秋の集御催候や、左候は爰元の俳諧一卷下し可申上方筋別座敷、炭俵にて色めきわたり候。兩集共手柄を見せ候。少は桃隣にも師恩貴きすべをわきまへ候へと御申成候べく候。桃隣俳諧俄に替り上り候と専沙汰にて候。急便早々。

とあり、又晋風氏の「新編芭蕉一代集」に鈴木潔氏所藏、十一日附、助風宛の書簡

(前略) さて本庄村の神事に付春日宮へ奉納句「ひると鳴しり聲寒し夜の鹿」此句は奈良にて致候

なれ共、おかしき句出かね申候に付こゝにて仕廻可申候。キ丈句も一兩日中に御下しまち入候。仍而如此候。

とある。九日に出來た「悲し」を、十一日には「寒し」と改めてゐる。

更けし月光を踏んで、猿澤の池のほとりをそゞろ歩めば、夜の小男鹿の妻や呼ぶらん、ひいと鳴く音が悲し、といふのである。「悲し」は卒直ではあるが感情をそのまゝの表現であり、「寒し」は寂寥味を象徴するだけ詩情が饒かである。

菊の香や奈良には古き佛達 (笈日記)

「笈日記」九月九日の條にある。前句に引用せる杉風宛書簡参照。

重陽の日支考、惟然など、奈良に在つての吟で、菊は到る所に芳香を放つてゐる、そして奈良は堂塔伽藍に各千餘年を経たる佛像が、今猶ほ嚴然として拜まれる、と、菊の色や香やと古都の佛とに、相通ずる或氣分を感得して、二つながらなつかしんだのである。

菊の香や奈良は幾世の男ぶり

(泊船集)

前々句下に引用の杉風宛書簡参照。

これも亦同時の吟で、「男ぶり」は奈良に生活する男性をいふのではなく、奈良の都そのものを人格化してしかいふのである。奈良の都はさすがになつかしき佛を残してゐて、幾世むかしの男ぶりが見らるゝ、といふのである。

くらがりにて

菊の香にくらがりに登る節句かな

(菊の香)

元祿十年の「菊の香」にある。「くらがりに峠」は奈良と大阪の殆ど中間で、大和河内の國境にある。奈良を九日の朝に立ち、暮てから大阪に着いたのだから、くらがりに峠は午過ぎ位に越したのであらう。

途中到るところ咲き誇れる菊の香に浸りつゝ、くらがりに峠をのぼる節句なるかな、と詠歎したのである。

秋九月九日奈良より難波津にわたる、生玉の邊より日を暮して。

菊に出て奈良と難波は宵月夜
菊にいで、奈良と難波は薄月夜

(笈日記)

(芭蕉翁行狀記)

「枇杷園隨筆」に廿三日附、意專、土芳宛の書簡

兩吟感心、拙者逗留の内は此筋見えかね無心元存候處、さてく驚入候。五十三次前句とも秀逸かといづれも感心申候。其外珍重あまた、總體かるみあらはれ大悦不少候。委細に御報申度候得どもいまだ氣分も不勝、何角取紛候間、伊勢より便次第に以細翰可申上候。右之氣分故發句もしかく得不仕候。九日南都をたちける心を「菊に出て奈良と難波は宵月夜」、秋夜「秋の夜を打崩したる咄

かな、秋暮「この道を行人なしに秋の暮」

があり、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に加藤犀水氏所藏、九月廿五日付、正秀宛の書翰に遊刀被歸候間致啓上候。御無事にいまほど御隙の由珍重不過之候。伊賀へ素牛便之節御狀并月の御句感心飛入客則續猿蓑に入集申候。何とやらかとやら行先くつもりちがひ候て、當年秋も名残に罷成、漸々かみこもらふ時節に成候へ共、いまだかみこはもらず時雨は催し候。當年の内何五七日内なり共、得御意候様に存候へ共例の不定候。霜月の内には何とぞ心がけ可申候。若名月前後は伊賀へ探芝か昌房など御誘御尋にも預り可申候哉と同名半左門も相待申候。若其元へ得不參候は御左右可申候間、いがへ御出申様に御覺被成可被下候。爰元衆俳諧もあらく承候。之道、酒堂兩門の連衆打込之會相勤候。是より外に拙者働とても無御座候。重陽之朝奈良を出て大阪に至候故、「菊に出て奈良と難波は宵月夜」、又酒堂が枕もとにていびをかき候を「床に来て軒に入るやきりきりす」、十三日は住よしの市に詣て「升かふて分別替る月見哉」壹合升一つ買申候てかく申候。少々取込候て早筆御免とある。

八日九日共に朝は菊の花を見ながら立出で、その目的地の奈良と難波には共に宵月夜を仰きながら入つたといふのである。「薄月夜」では月のさまを表しただけで、此場合「宵月夜」の方が時間を表し得てよ。

床。に。來。て。軒。に。入。り。き。り。く。す
猪。の。床。に。も。入。り。き。り。く。す

(木 枯)

(芭蕉句選拾遺)

前句の下に引用の正秀宛書翰中に「酒堂が枕元にて軒をかきしを」として此句がある。即ち大阪の酒堂の宅に泊つて、一室に寐たら、酒堂がいびきをかいたので此句が出来たのである、二句何れか初案と再案であらう。廿五日付の正秀宛書簡を認めてから、五日めの廿九日の夜には病氣にかゝつたのだから、「猪の床」が初案で、「床に来て」が再案だらうと推測する。

共に「詩經」の蟋蟀入我牀下からの連想で、(一)は、きりくすが、床のほとりに來鳴いて、酒堂の鼾聲と相和するやナア、と詠歎したのであり、(二)は、きりくすが、凄じき鼾をかく伏猪の床に

も入るやナア、と詠歎したのである。

住吉の市に立て、そのもどり、長谷川畦止亭に、

おのく月を見侍るに。

升 買 て 分 別 か は る 月 見 かな

(住吉物語)

「笈日記」に支考は

今宵は十三夜の月をかけて、すみよしの市に詣けるに、晝のほどより雨ふりて、吟行しづかならず殊に暮くは悪寒になやみ申されしが、その日もわづらはしとて、かいくれ歸りけるなり。次の夜はいと心地よしとて、畦止亭に行て、前夜の月の名残をつぐなふ。住吉の市に立てといへる前書あり。

と記してゐる。其歌仙は「秋の嵐に魚荷つれだつ、畦止」家のある野は刈あとに花咲て、惟然」以下酒堂、支考、之道、清流の連である。

九月十三日住吉の相撲會を俗に寶の市とも云ひ、そこで升を買へば富貴になると云て、縁喜を祝ふて人々これを購ふ。芭蕉も十三夜の觀月の約束があるので、寶の市をかけて出むき、世俗に仿つて何とはなしに一合升を買つたが、氣分がすぐれず悪寒もするので、其まゝ歸り、翌十四日夜畦止亭で昨夜の償ひに會をしたので、昨夜の事情を、升を買てやがて氣分がわるくなり觀月の分別がかはる月見なるかな、と現的に詠歎したのである。

其 柳 亭

秋 も は や は ら つ く 雨 に 月 の 形

(笈日記)

「笈日記」によれば、十七日から二十日まで四日間の作である、猶同書に

此句の先「昨日からちよつくと秋も時雨かな」といふ句なりけるに、いかにおもはれけむ、月の形にはなししかへ申されし、

とあり、「三冊子」にも同意義のことが記されてある。「晝兄弟」に其時の「下葉色つく菊の結び添、其

柳「こつそりと獨りの當に蕎麥操て、支考」以下、酒堂、游刀、惟然、車庸、之道等の歌仙がある。或は時雨めかしてはらつく雨に、或は日毎に缺けかける月のなりに、秋もはやいつか末となりゆく、といふのである。

秋の夜を打崩したる咄かな

(笈日記)

「笈日記」に支考は

廿一日二日の夜は雨もそばふりて静なれば「秋の夜を打崩したる咄かな」此句は寂寞枯稿の場をふみ破りたる老後の活計、なにものかおよび候はんとおのゝ感じ申あひぬ。と記し、「松濤集」には端書が「菊月二十一日湖江車庸亭」とありて、「月待ほどは蒲團身にまく、車庸」西の山二ばな三ばな雁啼て、酒堂」以下、游刀、飄竹、惟然、支考、と七吟の半歌仙がある。秋雨蕭々たる一夜、其寂寞さをうち崩したる、人々とのたのしき雑話なるかなと、詠歎したのである。

車庸亭

面白き秋の朝寝や亭主ぶり

(笈日記)

前句と同時の作で、「松濤集」には端書が

あるじは夜あそぶことをこのみて、朝寝せらるゝ人なり、宵寝はいやしく朝起はせはし、とある。

車庸のあるじぶりが、さすがに俳人だけあつて、宵寝のいやしきにあらず、朝起のせはしきにあらでおもしろき秋の朝寝やナア、と詠歎したのである。

人聲や此道かへる秋のくれ

(笈日記)

所思

此道や行人なしに。秋の暮

(同)

此道を行人なしに。秋の昏
此道を行行人なしや。秋の暮

(枯尾花)

(淡路嶋)

支考の「笈日記」に

二十六日は清水の茶店に遊吟して、泥足が集の俳詣あり。連衆十二人。此二句の間いづれをかと申されしに、「この道や行ひとなしに」と獨歩したる所、誰かその後にしたがひ候はんとて、そこに所思といふ題をつけて、半歌仙あり、爰にしるさず。

とあり、「其便」に

此集を鏤んとする比、芭蕉の翁は難波に抖擻し給へると聞て、直にかのあたりを訪ふに、

として「岨の島の木にかゝる蔦、泥足」月しらむ蕎麥のこぼれに鳥の寐て、支考以下、游刃、之道車庸、酒堂、畦止、惟然、龜柳、の連で半歌仙ある「菊に出て」の句下に引用したる意専、土芳宛書翰参照。又「枯尾花」に

九月二十五日、膳所曲翠子よりいたはり迎へられし返事に「此道を行行人なしに秋の昏」と聞え

けるも終のしをりをしられたる也。

とある。次の句と同所での吟である。

(一) 秋の夕暮に、人の聲のするのはや、此道をかへるナラン、と想像したのであり。

(二) この秋の暮に、我亡き後はこの道はや、行く人なしに空しく荒れ果つるナラン、と想像したのであり。

(三) この秋の暮に、此道を行く人なしに荒るゝに任すナラン、と想像したのであり。

(四) 秋の暮に、此道を行く人がなしやナア、と詠歎したのである。

(一)(三)(四)は同一吟が誤り傳へられたもので、構想と表現と相俟つて正しいのは「此道や行人なしに」である。猶「此道」とは俳諧の大道たることは云ふまでもあるまい。

松。風。や。軒。を。め。ぐ。つ。て。秋。くれぬ
松。風。の。軒。を。め。ぐ。つ。て。秋。くれぬ
松。風。の。軒。を。め。ぐ。り。て。秋。くれぬ

(笈日記)

(泊船集)

(俳諧會我)

松の風軒を廻つて秋暮ぬ

(翁草)

「木枯」に端書が「大阪茶店四郎左衛門亭にて秋を惜む」とあり、「笈日記」に「是はあるじの男の深くのぞみけるより、かきてとどめ申されし」と附記がある。九月二十六日清水の茶店深瀬四郎左衛門の宅での吟である。

(一)は、軒をめぐるものは松風であるから、「や」は勢ひ疑問云起格になつて、松風がや軒をめぐつてナラン、秋が暮れぬ、と二段切になる、これは確かに支考の誤記である(二)(三)(四)は共に、松風が軒をめぐつて、そして秋が暮れぬ、といふので何れも正しい。

旅懐

此秋は何で年よる雲に鳥

(笈日記)

「笈日記」に前の句に續いてあり、又支考の

此句はその朝より心に籠てねんじ申されしに、下の五文字、寸々の勝をさかれける也。是はやむ事なき世に、何をして身のいたつらに老ぬらんと、切におもひわびられるが、されば此秋はいかなる事の心になはざるにかあらん。伊賀を出て後は明暮になやみ申されしが、京大津の間をへて伊賀の方におもむくべきか、それも人々のふさがりてとどめなば、わりなき心も出きぬや。どかくしてちからつきなば、ひたぶるの長谷越すべきよし、しのびたる時はふくめられしに、ただ羽をのみかいつくろひて、立日もなくなり給へるくやしさいとどいはむ方なし。

と附記があり、「蕉翁全傳」に「二十六日新清水彼方此方徘徊して」とある、即ち前の「松風」と同時同所の作である。

雲中に翱翔する鳥、即ち行雲流水に身を任せて旅を常とする我も、この秋は何とてかくは年よることぞ、と我身の老衰をかこち歎いたので、この頃よほど身体の異状を自覺してゐたやうである。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

(笈日記)

「笈日記」に支考の

是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし。此日の一會を生前の名残とおもへば、その時の面影も見るやうにおもはるゝ也。

と附記があり、園女は「菊の塵」の序中に

芭蕉翁たつねきまして、白菊の目にたてゝみる塵もなし、と吟じ出されしにより六々の巻をなしぬ。

と記してゐる。連句として最後のこの歌仙は、元禄七年九月二十七日の興行で、「紅葉に水の流す朝月その女」冷々と鯛の片身を折曲て、之道以下、一有、支考、惟然、酒堂、舍羅、荷中の連業である猶此句に就ては「清瀧や」の句下参照を要す。

白菊の清浄なるをかりて園女の閑雅なる比し、目にたてゝ見るべき塵だになし、と云つたのである。

畦止亭に於て即興、月下送兒

月 澄 や 狐 こ は かる 兒 の 供

(其 便)

「笈日記」に支考は

畦止亭、今宵は九月二十八日の夜なれば秋の名残をおしむとて、七種の戀を結題にしておのゝ發句あり。是は泥足が其便集に出し侍ればこゝに記さず。

と記してゐる。即ちこの句の「兒」は「ちご」と訓んで、「男色」の意であり、それを念者が送り行く風情である。

訪ひ來し兒と秋の夜の闌くるも知らで語り合つたが、明日をちぎりて歸らんといふ兒の、しほらしうも狐がこはしといふに、さらば門邊まで送りまわらせんと、供して出づれば、月は皓々と中天にかゝつて、より添ひ行く二人が影を地上にうつす、といふ濃艶な情景である。

秋 深 き 隣 は 何 を す る 人 ぞ

(笈日記)

「笈日記」九月二十八日の條のつゞきに支考は

元 禄 七 年

明日の夜は芝柏が方のまねぎおもふよしにて、發句つかはし申されし。
と記してゐる。二十七日に園女亭で菌をもてなされ、其前から健康をそねてゐたのでそれにあてられ、二十八日は氣持がわるく、二十九日の芝柏の約束も心もとなく思つたので、豫め此句を送つて置いたのであるが、豫感が適中して、二十九日は出席できず、夜から泄痢があり、晦日から床に就いたのである。

此句は二十九日の芝柏の會の爲めに、二十八日に畦止亭で作つたものである、その畦止亭は市井のこととて何れ隣りも接近してゐたらう、それで、こゝでは「座が秋を惜む題で戀の句などを作つて夜を更かすが、隣家は何をしてこの秋を送る人ぞ」といふのである。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る
旅に病で枯野をめぐる夢心
旅に病でなをかけ廻る夢心

(枯尾花)(笈日記)

(枯尾花)

(笈日記)

其角の「芭蕉翁終焉記枯尾花」に

(前略) 長月晦日の夜より床にたふれ、泄痢、度しげくて物いふ力もなく、手足氷りぬれば、あはやとてあつまる人々の中にも、去來京より馳くるに、膳所より正秀、大津より木節、乙州、文章、平田の李由つき添て、支考、惟然と共にかゝる歡きをつぶやき侍る。もとよりも心神の散亂なかりければ、不淨をはかりて人々近くも招かれず、折々の詞につかへ侍りける、たゞ壁をへだて、命運を祈る聲耳に入れるにや、心弱きゆめのさめたるはとて「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」また「枯野をめぐる夢心」ともせばやと申されしが、是さへ妄執ながら風雅の上に死なん身身の道を切に思ふ也、と悔まれ。八日の夜の吟也。

とあり、「笈日記」には八日の條に

(前略) 此夜深更におよびて介抱に侍りける香舟をめされて、硯の音からくと聞えければ、いかなる消息にやとおもふに、病中吟「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」その後支考をめして、「なをかけ廻る夢心」といふ句づくりあり。いづれをかと申されしに、その五文字はいかに承り候はんと申はいとむつかしき事に侍らんと思ひて、此句なにかおとり候はんと答へける也。いかなる不思議の

五文字か侍らん、今ほいなし。みづから申されけるは、はた生死の轉變を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もや半百に過たれば、いねては朝雲暮煙の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく。是を佛の妄執といましめ給へる、たゞちに今の身の上におぼゝ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれんとのみおもふはと、かへすくくやみ申されし也。さばかりの叟の辭世はなかりけると思ふ人も世にあるべし。

とある。其角は「枯野を廻る夢心」とき、支考は「なをかけ廻る夢心」ときいたとあるが、その何れが正しいか、とにかく其方はやめて(一)に決定したので、これが俳界の孔子わが芭蕉翁の最後の一句である、そして十二日に五十一歳でこの世との隔りの帳は閉されたのである。

句意は云ふまでもなく、生涯身を雲水に托したる芭蕉は、此行或は長崎までもと志したほどで、病床の夢魂或はそれらの天に飛んだのであらう。

元禄年中 (四十五||五十一歳)

以下晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄年中とするに従ふ。

富士に行椿にかくれ家に出つ

(芭蕉句選)

或る人を訪問するに、遙遠に見える富士を眺めつゝ行くと、それがいつか椿の蔭になつたと思つたら、我が訪ねべき家の在るところに出た、といふのである。

落ちざまに水こぼしけり花椿

(芭蕉句選)

椿の花がボタリと枝から落ちる、其とたんに花の中の溜り水をこぼした、といふ客観の瞬間美である。

竹の間のいばら見せじやほとゝぎす

(書簡)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に土居剛吉郎氏舊藏の破琴宛書翰

一 元禄年中一

(前略)長左衛門殿方祝言も相調候由、是以目出度候。嗚々隠居にも満足にて可有之と察存候。然は何ぞと存候へ共、此一句古句に候へとも賀して申入候「竹の間のいばら見せじやほととぎす」此ほ句中に此すへ共に身上あつく被成御成候。山伏も門出とは此事成べし、委は頓て之内參候。何角も可申述候。以上。

をあけて、元祿年中としてゐる。

竹は眞直ぐにのび、その竹林の間々には刺をもつた茨がひねくれて散在してゐる、それであの時鳥にはひねくれて刺のある茨をば見せじや、と詠歎したのである。

晝見れば首筋赤きほたる哉

(芭蕉句選)

夜は尻の方が光るのでどんな虫かと思つてゐたが、晝見ればこれはまた意外に、首筋のあかき螢かなと詠歎したのである。

手ばなせば夕風やどる早苗哉

(俳諧古選)

早乙女が植ゑる行くに、その手を離れるとすぐに夕風がそれに吹く早苗かな、と詠歎したのである。

紫陽花や帷子時の薄淺黄

(陸奥千鳥)

あの紫陽花もやまた帷子時の薄淺黄に咲けるナラン、と想像したので、人が薄淺黄色の帷子を着る頃であるからの連想である。

枝なくて世にかゝはらぬ蓮かな

(熊野鴉)

右に左にと枝を出すこともなく即何等世にもとめることもなき、直ぐなる蓮かな、と詠歎したので、人世觀をふくんでゐるのである。

初月や 向ひに 家のなき所

(俳諧古選)

二日三日の初月は、暮るゝと思ふ間もなく西に没してしまひ、うつかりすると気がつかずにゐる、それで、向ふに家のない片側町の初月やナア、と詠歎したのである。

あふみ路を通り侍る比、日野山のほとりにて、

胡麻といふものに上の絹とられて

剝れたる身には 砧のひゞきかな

(芭蕉鹽)

近江路に足を入れたのは貞享五(元禄元年)の夏が初めてで、秋季では元禄三、四、七年であるから、その何れかの年であらう。

胡麻の蠅に剝がれたる身には、一層さびしげに聞こゆる砧のひゞきかな、と詠歎したのである。

年代不明

以下晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に年代不明とするにしたがふ。

梅 咲て よろこぶ鳥のけしきかな

(芭蕉句選拾遺)

梅が咲き春信の音つれ來たので、それをよろこぶ禽のけしきなるかな、と詠歎したのである。

船 いそぎなれも 汐干に 行人か

(むつのゆかり)

急いで船をすゝめてゐると、他にもまた船をいそがせて行く人がある、それで汝も亦汐干に行く人かと詠歎したのである。

すゝぼりてごみ焼家に啼燕

(芭蕉句選拾遺)

煤によごれて芥をたく家、即ち田舎家に鳴く乙鳥かな、との詠歌である。

壁土の家する木曾のつばめかな

(芭蕉句選拾遺)

乙鳥が壁土の家をつくるのでなく、土で家を造つた木曾あたりに飛び交ふ乙鳥かな。と木曾街道あたりの風景を詠歌したのである。

てふの羽の幾度越る塀の屋根

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に「句集に古木亭にてと有」と附記があり、「一葉集」には「乍木亭」と前書がある。乍木は伊賀の連衆である。

塀の屋根の上を、あちらからこちらへ、こちらからあちらへ、と蝶の幾度越ゆることぞ、と心のうちに軽く疑つたのである。

似合しや豆の粉めしに櫻狩

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に「當地」と附記がある、同書の著者寛治は京都の人であるが、其材料は伊賀上野の窪田何某から得たのだから、「當地」は即ち伊賀と見るべきものであらう。

「豆の粉」は「きな粉」である。きな粉まぶしの握り飯に櫻狩とは、佗人たる我に似合しやナア、と詠歌したのである。

ひとり尼わら家すげなし白つゝし

(芭蕉句選拾遺)

庭には白つゝじが咲いて居り、尼がたゞひとり住んでゐる藁家の風情が、見るからに愛想気なし、と

いふので小さな尼寺などのさまであらう。

古 裕 も の 見 の 松 に は づ か し や

(芭蕉句解)

「物見の松」といふのは諸所にあるが、熊坂長範の物見の松ならば、岐阜縣不破郡青野村にある。我は今猶古裕を着て居り、物見の松の新芽のすく／＼と装つたる姿に對して耻かしゃ、と詠歎したのである。

ほ と ぎ す 鐘 に あ は れ を と ぎ め け り

(四季風物畫帖)

時鳥の鳴く音は、曉の鐘をつくころが最もよい、といふのである。

手 入 と ぐ く 水 際 う れ し か き つ ば た

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」には「土芳所持書捨に」と附記がある。

杜若が手のとくほどの水際に咲いてゐるのがうれしい、といふのである。

麥 刈 て 三 尺 高 し 生 駒 山

(鏞 鏡)

畑の麥を刈り取つたら、生駒山が高く思はれる、といふのであるが、「三尺」と云つたあたりは悪い作意である。

手 を の べ て 覆 盆 子 喰 け り 馬 の 上

(歌遊宛消息)

馬の上から手をのばして、道の邊に熟れてゐる莓を摘んで食つた、といふので、いかにも旅の興らしい気分がある。

松風の落葉か水の音すゞし

(芭蕉句選拾遺)

潺湲と流るゝ溪流のほとりに佇つて、其涼しき音に聞きほれてゐると、松籟が颯々と吹いて松の落葉がはら／＼と水の面にこぼれる、それで水音の涼しいのは、この松風を落す葉のためかと、詠歎したのである。

かけて置拂子は智慧の土用ぼし

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に「松舟聞書に有」と附記がある。
拂子が掛けてあつて、時折それが風になびく僧の幾年の修養を憶つて、あれは云はゞ智慧を土用干するやうなものである、といふので、禪僧の居室の風情であらう。

聲にみな鳴きしまふてや蟬の殻

(芭蕉句選拾遺)

蟬のもぬけのかく空しきは、身のすべてを鳴く音に消耗しつくしてにやあらん、と想像したのである。

木啄のはしらをたゞく住居かな

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に「藤堂與三郎殿所持短冊」と附記がある。

我庵は、木啄が、人の住むとも知らで、來りて柱の虫を食まんとするほどの住居なるかな、との詠歎である。

張ぬきの猫も知るべし今朝の秋

(芭蕉句選拾遺)

「一葉集」には延寶天和年中の作としてあるが、いかさまさうであらう。

犬張子ではなく猫張子で、むかしはそんな玩具があつたのだらう。立秋といへばどこか冷氣を連想し。猫は寒がる動物だから、猫張子に今朝の秋の感じが見える、といふのである。

三日月の空にさいたは何の花

(四季風物畫帖)

秋の月のさやけさを「月の桂の花」といふ。それで、まだ望の夜には遠き三日ころの月の風情、即ち空に咲いた苔は何の花ぞ、と疑つたのである。

くろきもの松原ばかり月夜哉

(四季風物畫帖)

一天片雲なく、下界にくろきものはたゞ松原ばかりなる、皓々たる月夜かな、と詠歎したのである。

曙や霧にうづまく鐘の聲

(續句空日記)

夜はしらくと明けて、日が漸く東天に昇れば、霧は渦を巻いてうごめき、折しも曉を報ずる鐘が聞える、その渦まく霧を、鐘の音が渦まくものと主觀に叙したのである。

たびにあきてけふ幾日やら秋の風

(眞蹟集覽)

行雲流水に身を打ちまかせて、旅をつづける身ながらも、落寞たる秋風の身に沁むころは、或は旅にあきくして、今日で幾日やらん、と思つたこともあらう。

蝶鳥の知らぬ花あり秋のそら

(芭蕉句選拾遺)

「八雲御抄」に「月の桂の花はひかりをいふ」とある。今宵のこの秋天には、蝶鳥の知らぬ月の桂の花がある、と月の光を賞したのである。

花に 来て 花野に 歸る 燕かな

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に「松舟聞書に」と附記がある。

春は櫻の花のころに来て、秋は千草の花咲くころ歸り行く乙鳥なるかな、と詠歎したのである。

行 燕 又 來 る 芽 は り 柳 迄

(障子紙)

柳のはら／＼ちり初めるころは乙鳥は南へ歸つてゆくが、もとより柳に乙鳥と云はるゝ仲好しだからやがてまた芽張り柳までにはまたこちらへ來る、といふのである。

鳴 鹿 や 似 合 は ぬ 角 の 二 本 まで

(宰陀稿本)

峰の月かけに妻戀ふる鹿の啼く音がする、歌にもあはれに歌はるゝものから、どんなにか優しげな姿だらうと思つたら、其聲のやさしきには似合はぬ角の、しかも二本までもある、といふのである。

江 鮭 あ り も や す ら ん 富 士 の 湖

(芭蕉句選拾遺)

「江鮭」は「あめの魚」とよむ、「鮭」とも書き又「やまめ」ともいふ。「富士の湖」は五湖のどれであるかわからぬが、とにかく其うちの一をさしたのであらう。

秋水の透徹さは、空の一物をだにのがさず映して、或は「あめの魚」即ち「天の魚」のありもやすらん、と疑つたのである。

馬 士 に 落 さ る 身 は 木 の 子 哉

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

「芭蕉翁眞蹟拾遺」に一水宛の書翰

一年代不明

如行老御歸候に付乍便申まいらせ候(中略)さて又木曾路にて落馬の時發句申候事「馬士に落さるゝ身は木の子哉」撓みては雪まつ竹の氣色哉」(下略)

があるが、大垣の如行宛で、木曾路の落馬云々とあれば、貞享五(元祿元年)であらねばならず、「撓みては」のは年代がずつと降て、しかも「笈日記」に駿河の嶋田の部にある、且又木曾路で落馬の事は「更級紀行」中にも所見がない、かれこれを考證すると此書翰の存在性は大分怪しくなつて来る。馬方に落さるゝ身は、土にちよこんと、あだかも木の子の如くなるかな、といふのである。

手の冷るほどゝもしろし硯石

(山住氏詠草)

これは結構な硯で、などゝ手にのせて愛玩する、そして夫をもつ手の冷ゆるまでに面白い、といふのである。

山寒し心の底や水の月

(廿五ヶ條)

「芭蕉句選」には秋の部にあり、晋風氏の「新編芭蕉一代集」には見えない。

山は幽邃にして秋ながら既に寒い、そして潭水は月をうつして澄みきつてゐる、それを望めば我心も亦自ら澄みに澄んで、水中の月が我が心か、或は我が心の底がや水中の月ナル、と疑つたのである。

夜着に寝てかりがね寒し旅の宿

(芭蕉句選拾遺)

夜着を着て寝ても、空を鳴き過ぐる一行の雁の鳴く音が寒し、といふので、旅愁が鮮やかに描き出されてゐる。

紙子にも霜や置かと撫て見し

(芭蕉翁發句集)

「紙子一枚は夜のふせぎに」と云つてゐる、其紙衣を被て寝ても、猶ひししと骨に沁む寒さに、着

たる紙子にも、若しや霜がや置くかと思つて撫でてみし、と旅愁を云つたのである。

狐歎じて云、世にかはかぶりと云あり、中々人

間よく化て禽獸は衰たり、仍而

足あとは雪の人也かはかぶり

(むつのゆかり)

人の皮をかぶりながら心は禽獸にも劣る人がある、この頃は人間の方がよく化て、狐の方はお株をとられてしまった。それで雪中の足あとは、獸ならで其かはかぶり即ち化けた人なり、といふのである。

雪は雨雨は柳となりにけり

(井上氏藏短冊)

枯柳に雪がつもつてゐる、その雪がいつしか雨になり、雨になつたと思つたら、雪がとけてたゞの柳

となつてしまった、と詠歎したのである。

己が身を枕に鴨のうき寝哉

(消息)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に井上辰九郎氏所藏の霜月廿二日附、源井宛の書翰

(前畧) 麻布之日限とさし合候まゝこまり申候。且又此間素堂師より申譯も無之由、別段書面まいり申候。詠草板下に御書入之所は「己か身を枕に鴨のうき寝哉」御添筆頼入候。其内拜顔に可承候御禮等可申候。以上。

をあげて疑を存してゐる。文面はいかにも腑に落ちないところがある。首をかして、いかにもわが身を枕にしたる如き、鴨の寝姿なるかな、と詠歎したのである。

ふぐ汁やあほうになりとならばなれ

(華鳥文庫)

河豚には命を取られると知つても食ふ人がある、まして阿呆位のことならば、なつてもかまはぬ、といふのである。

疑問 (一) やゝ疑はしきもの

勝峰晋風氏は「新編芭蕉一代集」に「不審抄」として五百二十七句を掲げてゐるが、賛川他石氏の「芭蕉全集」には其うち百五十三句を芭蕉句集の補遺の部にあげてゐる。それは晋風氏は「もとの水」「一葉集」の所載でも、享保以前出版の俳書にないものはすべて不審と認め他石氏は「もとの水」「一葉集」のものに疑は存しながら、猶それを捨て去るに忍びず採つたのと、若干兩氏の見解の相違に基つくものあるに因る。

こゝには他石氏の「芭蕉全集」補遺の部中より、既に年代順の部に採録せる残りのものを掲げる。

伊勢に居て見るならいかに初日の出

(近古名流手蹟)

初日の出は何所で仰いでも清浄な気分が溢れるが、殊に宮居尊く神寂びたる伊勢に居て見るならばいかにあらん、と推測したのである。

去年ははやそこへすすされよ次郎月

(一葉集)

正月を太郎月と云ひ、それに對して十二月を末子の意で乙子月又は弟月といふ「次郎月」もまた同意である。

一夜明ければもう太郎月であるから、次郎月の去年は、はやそちらへすすされよ、と月名を人格化したのである。

かびたんもつくばせけり君が春

(一葉集)

「甲比丹」は、徳川時代に我國と通商を許されてゐた唯一の歐州人たる和蘭商船の船長で、在長崎の和蘭人の長として、年を定めて江戸に参府する定めであつた。

君が春なる今や、外臣の和蘭の甲比丹までも膝下に匍ひつくばせた、と國威の海外に及びたると天下の泰平を頌したのである。

伊勢が賣家にも來たり千代の春

(もとの水)

「伊勢」は宇多天皇の皇后に奉仕し、後に天皇に召されて皇子桂宮を生み奉り、伊勢の御と呼ばれ、延喜年代には貫之と並び稱されたほどの歌人であつたが、晩年は零落して、「古今集」に、「家を賣りてよめる。あすか川淵にもあらぬ我が宿もせにかはりゆく物にぞありける、伊勢」とある。その歌から

の構想で、嘗ては華やかであつた伊勢も、家を賣るほどに落魄した、その伊勢が賣る家にもまた、人々が千代と壽ぐ春が來た、といふので、春は得意の人にも失意の人にも一様に來る意を云つたのである。

正月も美濃と近江や閏月

(もとの水)

今年は正月の閏で、美濃でたゞの正月を、近江で閏の正月を迎へたことやナア、との詠歎である。

自畫自賛

恵方から曳やことしも牛の玉

(一葉集考證)

「年玉」を年の玉とした例はある、それを丑年であるが故に更に「牛の玉」と語路を合せたので、貞門の末流には「八幡の森で鳴きけりはとぎす」と、時鳥を「はとぎす」としたのもある、これ亦同

じ駄洒落趣向に屬する。

丑歲故牛が恵方から今年も年玉をひくやナア、と詠歎したのである。

我年を柵へあげてや若えびす

(一葉集)

或は延寶三年前の「年や人にとらせていつも若夷」と關係ある句ではないかと思ふ。参照を要す。今年もまた顔見知りの若夷賣が來た、去年にくらべて年をとつたとも見えないのは、さては彼は我が年とする事は柵の上へあげて置いてや、かくいつも若い若夷ナラン、と想像したのである。

白魚に價あるこそ恨なれ

(芭蕉句選)

「芭蕉句選」春追加の部に

此句「おだまき」に見侍りしが名なければはぶく、今多聞の意に任て記す。

一疑 問一

と極めてあやふやなことを云つてゐる。晋風氏の「新編芭蕉一代集」には全く省き、他石氏の「芭蕉全集」にはその「芭蕉句選」中に其まゝ存してある。「おだまき」には此句の下には名を缺いてゐるので、果して芭蕉とし得べきか頗る疑問である。

白魚の如き純潔の感あるものに、世俗のきめた値のあるこそ恨めしき限りなれ、といふのである。

鶯や茶袋かゝる庵の垣 (續寒菊)

うぐひすが嬌音を弄してゐる、そこには茶ぶくろの掛け干してある草庵の垣が見える、といふのである。

悲しまんや墨子芹焼を見ても猶 (一葉集)

「芹焼」は前に「芹焼やすそわ」の句の條を参照せられたし。墨子は孟子と同時代の人で、孟子一派

からは、楊子と共に楊墨の徒と排斥された人で、その墨子は白練糸を見て、黒にも赤にも染めやうで何れにもなると云つて悲しんだ人である。

白絲の染めれば何色にもなるの見て泣いた墨子は、寄鍋の中のもの、煮え過ぎて色の變つたのを見ても猶悲しまん、と想像して更「に」やと詠歎したのである。

まち兼て隣の梅を折にゆく (一葉集考證)

梅が咲いたとて先方からくれるのを待ちかねて、こちらから折りに行く、といふのである。

梅か香や見ぬ世の人に御意を得る (續寒菊)

梅は馥郁たる清香をはなつ、それにむかへば、往昔の梅を愛せし人々が心裏に髣髴として描き出されて、親しく會談する如くである、といふのである。

古郷の梅や浪花の二年越

(もとの水)

浪花に二年越の日数を過ぎて帰つてみれば、浪花津に咲くやこの花と名にしあふ浪花の梅にも劣らで、この古郷の梅やナア、と詠歎したのである。

梅か香にちやうりやうふりやう黒木賣

(芭蕉葉舟)

中の「ちやうりやうふりやう」は其頃流行の小唄「小原木買はいく／＼てうりやうふりやう、ひゆやりやにひやるろ、あらよひふりやうるりひようふりやう」の一節で、ただ其調子を採り來つて黒木賣を表したまでのものである。

梅折て椿に迷ふたもとかは

(もとの水)

そこには梅も椿も咲いてゐて、先つその梅を折つたが、また心うつりして椿も折らうかと思ふ袂かなと詠歎したので、「袂」は嚴密に衣服のそれをさすのではなく、手先ともいふべき輕き意である。

逃水や椿ながるゝ竹のちく

(もとの水)

「逃水」は武藏野の逃水と云つて有名なもので「あつま路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな、源俊頼」などの如く、かくれる、忽然として見えぬ意などに引かれてゐる、然して其如何なるものは諸説があつて決定しかねる。

(一)は春の草原を遠くから見ると水の流れてゐる様で近づけば水でなく、更にまた前方に同じ様に見えるから即ち逃げ水とする説、これは地上から騰る水蒸氣の現象で、最も多く採り用ひられてゐる
(二)は涇々と流れてゐる水が、或る場所に到ると、其水がどこへ行つたかと思ふ様に行末がなくなる、即ち今までの地上水が地下水に變ずるもの(三)一年の内の或日だけ水の絶ゆる川(四)霖雨の

出水で、行人があちこち逃けて渡る川。以上の内(三)(四)は論ずるに足らず(一)(二)は逃水の實體として考察を要するものであるが、こゝには逃水考をすべきでない。ただ此句に於ては地上水の忽ち地下水に變する逃水ではあたらないので、一般に認められる水蒸氣の逃水とするのが相當であらう。

句意は武蔵野の逃水と歌人に唱へられる水蒸氣がいかに小川でもあるかの如く遠くに見え、また足もとには竹の奥へ落椿がせせらぎ水に流れて行く、と遠方の大景の水を觀、さらに轉じて近き小流の現象を見たのである。

葉にそむく椿や花のよそ心 (もとの水)

此句は「や」を感歎終止と見るか又は疑問云起と見るかで二様に解される。

一解は、椿は花も葉もコワボイ感じがするばかりでなく、花と葉が向き／＼勝手になつてゐる、それで一の木にありながら花のよそ心にへだて葉にうちそむく椿やナア、と詠歎したものと見る。

二解は、同じ理由ではあるが、椿にうちそむいて咲椿はや葉の方からそむくのでなく、花の方からよそ心にしてゐるナラン、と想像したものと見る。

眼に見るところのものは同じでも、一は花のよそ心なることを認めて詠歎し、二は花のよそ心なることを想像するの差がある。自分は第二解を採る。

けふひがん菩提の種を蒔日かな (一葉集)

「菩提」は梵語で、譯すれば正道或は大道となり、佛道に悟入するの意であるが、俗には先祖の菩提の爲めなどの如くに轉用される。

彼岸頃はすべて物の種を播くべき好季節である、ただに物の種ばかりでなく、菩提の種をまく日なるかな、と詠歎したのである。

捨ものに梨の接穂や山屋舗 (もとの水)

「山屋敷」とは山間の宅地で、そのあたりに、極めて無造作に扱はれてある梨の接穂やナア、と詠歎したのである。

しほ尻の尻も居らぬ春の駒 (もとの水)

「鹽尻」とは鹽田で砂を積み上げて塚の形にしたるものをいふ、「伊物勢語」に富士山を形容して「形は鹽尻のやうになんありける」といふのでも察せられる。しかしここでは鹽尻に深い意があるではなく、次の「尻」に對する枕詞式の効果をもつだけである。若駒が活氣ついて來たので、尻もすわらぬ春の駒かな、と詠歎の省畧法によつたものである。

芳野を下る時

飯貝や 雨に泊りて 田螺きく (もとの水)

「飯貝」は吉野川を挟んで上市町に對してゐる。芳野から下つて、雨のふる夜そこに泊つて、田螺の鳴く音をきく、といふのである。「笈の小文」の時の吟ではなからうか。

蛙子は 目すり 膾を啼音哉 (一葉集)

「目すり膾」は「和訓栞」に、

山東の人蛙を捕て熱湯に投じ、皮を剥て芥醋に和し食ふ、是を眼摩膾といふと本朝食鑑に記せり。宋書に蝦蟇膾見えたり。

とあり、また「俚言集覽」には「目こすり膾」として、其條下に「和訓栞」を引き、更に

愚按、蚪斗の四足を生じたる時、芥醋に投じ和すれば、前足をもて眼をこするもの也とて、眼こすり膾といふと聞けり。いまだ目撃せざる事なり。

とある。眼をこする形が泣いてゐるやうに見えるので、膾にされたことを泣く、に啼くをかけて、詠

歎したのである。

名所八體の内

貝寄る 風の手じなや 若の浦

(もとの水)

陰曆二月二十日ころに浪花の浦に吹く風で、其風の爲めに海濱一帯に貝を吹寄せ、其貝を二十二日の天王寺精靈會の造花の材料とし、この風を「貝寄風」といふのである。浪花の浦に吹き寄せべき貝を、紀州の浦に吹きよする、それが即ち風の手品である、と詠歎したのである。

名所八體の内

姨石に啼かはしたる 雉子かな

(もとの水)

「姨石」は信州更級村長樂寺にある、高さ五丈餘、横十間程ある。

姨捨山に捨てられた姨を連想して、今も姨石のほとりに啼き交はす雉子を詠歎したのである。

奈良行

春風や 人聲うつる 三笠山

(もとの水)

「三笠山」は或は「御蓋山」とも書く、即ち春日神社の神域である。

駭蕩たる春風が吹く、それにそのかさされた如くに行樂の人々が群集し、あちらにもこちらにも人が語り合ひ話し合ふ、といふのである。

春風や させるくはへて 船頭殿

(もとの水)

滿帆に春風を孕ませて、船は大海原をひた走りに走り、船頭は悠然として烟管をくはへて進路を見ま

もりつゝある、といふ雄壯な光景である。現在では川舟を漕ぐものをも船頭といふので、此句の感じがピッタリと来ないかも知れないが、此時代に於ける「船頭」なる語は現代の船長と同意義である、故に「殿」が効果があるのである。

矢橋歸帆(近江八景の内)

夕がすみ赤石の浦を帆のおもて

(一葉集考證)

「赤石」即ち播磨の明石の光景とも思はるので、其地名を假り來つたのである。

一抹の暮靄は湖の面を罩めて、矢橋の舟はさがら赤石の浦の帆の表に瀬戸の海を行く如くである。と
いふのである。

季吟勸進巻頭

和歌の跡とふや出雲の八重霞

(もとの水)

北村季吟が或社に奉納する連歌の巻頭として作つたのである。

須佐之男命が出雲の簸の川上に降りまし、須賀の地に到り、妃の櫛名田姫と共に御住ひになる爲め、そこに宮室を営まれた、其時「彌雲立出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を」と御詠みになつたのが、和歌の嚆矢であるとせられてゐる。

句意は、出雲の八重霞即ち須賀佐之男命の御歌を斯道の源流と見て、今猶和歌のあとをとひ、其餘徳を仰ぎ奉る、と詠歎したのである。

暮遅き四谷過けり紙草履

(もとの水)

「紙草履」は緒に紙を巻いたものをいふ。嵐雪に「四十にて四谷を見たり花の春」の句があるほどに四谷は當時の郊外であつて、現在の新宿とは觀念がちがふ。その四谷を春の夕方にぶら／＼通つた、といふのである。

瀬田夕照(近江八景の内)

遅き日にかわかぬ網の左り袖

(麻刈)

春の日の未だ暮れず、終日投網にすなれば、その雫にぬれて、乾かぬ左りの袖なるかな、と詠歎の省畧法によつたものである。

峰人や一里をくるゝ小山伏

(もとの水)

役行者の流れを汲む修験道の人々は、春秋二季に葛城山に登りて祈禱を爲す、春は熊野より葛城大峰に入り吉野に出る、これを順の峰入と云ひ、畧してはただ峰入といふ。峰入の先達は山路の險阻にも馴れきつて平然として行くが、小山伏はまだ足馴れず、一行から一里ほどもをくれる、といふのである。

昔つみて貧なる女機による

(もとの水)

貧家の女房らしいのが、夕食の料の苜をつんで、やがてまた機織にかゝる、といふのである。

古川にこびで芽をはる柳哉

(芭蕉翁句解参考)

古川に鯉も目を張る柳かな

(同)

「句解参考」には「矢矧堤」と端書がある。「こびで」は「媚て」で、樹本などの杖ぶりの様子ぶつたさまをいふ。

古き流れのほとりに、様子ぶつた姿で芽を吹いてゐる柳かな、といふのである。

初花にいのち七十五年ほど

(田毎の日)

世俗に初物を食へば七十五日長生きするといふが、我は今この初花を見て七十五年ほど壽命がます、といふのである。

待 花 や 藤 三 郎 が よ し の 山 (一葉集)

「藤三郎」は尺八の名手宜竹と同一人とされてゐるが確證もない、とにかく音曲關係の人なることは「吉野山」とは三線又は一節切をならふ者の手ほどの歌の曲名で、「先つ知るや宜竹が竹に花の雪」の條を参照せられたい、この時代に屢句によまれてゐるので知り得る。

待つ花即ち其間の心のもどかしさはや、かの名手藤三郎が將に得意の芳野山を籟き出すを待つ心のその如くナラン、と想像したので、「花」から「芳野山」の曲名を連想したのである。

三井晚鐘(近江八景の内)

盃 に 片 わ れ は な し 花 の 鐘 (麻 刈)

花を見つゝあればはや暮六の鐘が鳴り、空には十日ごろの片割月が仰がれる、しかしさかつきには片割はない、猶大に酌まう、といふのである。

半 日 の 雨 よ り 長 し 糸 ざ くら (もとの水)

折柄降つてゐたであらう半日の雨に飽きくしたが、糸櫻はそれより更に長いとも見られるが、自分は、或る半日の雨があつてより後、糸櫻が長くなつたやうに思はれるものと解する。

歌 よ み の 先 達 多 し 山 ざ くら (もとの水)

「先達」は先輩前人等の意で、山櫻に就いては古來和歌の名吟を残した人々が多い、といふ意である。

一疑 問一

九一七

京は九萬九千群集の花見かな

(一葉集)

九萬九千はただ人數の多きを具体的に云つたまで、九千群集は貴賤群集と掛け調になつてゐる、即ち都は今や何萬といふ貴賤群集に賑ふ花見なるかな、と詠歎したのである。

蝶鳥のうはつき立や花の雲

(一葉集)

櫻花は雲の如く、それにそとられて蝶も禽も皆うはつき出したことやナア、と詠歎したのである。

嵐山

花の山二町のぼれは大悲閣

(もとの水)

大悲閣は嵐山の西方の半腹に在る。満山花もて覆はれた中を二町ほど登れば、そこが大悲閣なり、といふのである。

花の陰硯にかはるまる瓦

(もとの水)

花の樹蔭に休らうて、ふと一句心にうかんだが、あやにく硯の用意がない、と見るとそこに丸瓦の一片があるので、それを硯に代用する、といふのである。

孤石がみちのく行を送る

むく起に隣の花のほひかな

(一葉集考證)

今朝早く起きたれば、孤石が行脚に出かけると云つて立寄つた、それはあだかも隣りの花の如く、羨ましい匂ひなるかな、と詠歎したのである。

上醍醐にて

留守といふ小僧なぶらん山櫻

(もとの水)

上醍醐の或る寺を訪ねたら、あたりは山櫻が咲きみちて居りながら、心あてにして来た住持は不在だと、小僧がいふ、このまゝ空しく歸るのも興なき事である、さらばこの小僧にからつてなりとも、暫くこの花の氣分を味はゝん、といふのである。

古寺の桃に米ふむ男かな

(もとの水)

古寺の裏所に一二本の桃の花がほの見え、その陰に米を搗く男の姿が見えるのを詠歎したのである。

尙白と浪花に下る

たゞ一夜桃に宿かる木幡かな

(もとの水)

浪花へ下る時、舟で宇治郡木幡の里を過ぎた、兩岸の桃は満開で、雞犬の聲のどかに聞え、武陵桃源もかくやと思はれる、此地の人達はこの桃源郷に生涯を送るであらうが、我々旅人はただ一夜此桃花の陰に宿をかる木幡の里かな、と詠歎したのである。

畫 讚

裾山や虹吐くあとの夕つゝじ

(もとの水)

場所は山の麓路で、今まで降つてゐた雨がやみ、虹は七彩鮮やかに半圓を描き、地にはつつじの紅が燃えんとしてゐる、といふ叙景である。

那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋て

一疑 問一

留守に來て棚さがしする藤の花

(一葉集考證)

芭蕉の那須の雲岸寺に佛頂禪師の庵を訪ねたのは初夏で、春季の「藤」が合はぬが、事實としては藤は初夏にも猶咲いてゐるので更にさしつかへはない。ただ佛頂禪師は前には其庵に住したが、當時は既に他に移つたのか、或はたまたま其日不在であつたかが明確でないが、「奥の細道」ではすでに前に他に移つたらしく見える。然るにこの句の「棚さがし」が、偶ま／＼外出といふやうに聞えるものと調和しない。即ち此句は更に研究を要すべきものである。藤はいづれ棚などもつくらぬ自然生のもので、あたりの樹の梢に名残りの花を見せてゐるのであらうその庵の不在に訪ねて、なつかしさにあちこちと棚をさがしてみる、といふのである。

箸の先に花咲せけり櫻海苔

(一葉集)

櫻海苔は紅藻で、その櫻海苔を箸でつまんだのを、櫻海苔が箸に花を咲かせた、と見立てたのである。

子規なくや黒戸の濱びさし

(もとの水)

上總木更津海濱を黒戸の濱といふが、同名の地が外にもあると聞いてゐる。黒戸の濱邊に蟹が家が點々と散在して居り、その上空を杜鵑が一聲鳴いて過ぐるやナア、と詠歎したのである。

なげや啼け耳のすうなるほとゝぎす

(一葉集)

世俗にしゃべり過ぎて口が酸くなるといふ、それから轉じて、時鳥よ、我耳の酸くなるほど澤山に鳴け、といふのである。

口すべれ油月夜のほとゝぎす

(一葉集)

脂を食すれば口がすべる、これも世俗にいふことである、どんよりした油月夜であるから、時鳥よ口をすべらして屢鳴け、といふのである。

戸の口に宿札なのれ郭公

(一葉集)

「芭蕉翁句解参考」には端書が「戸の口といふ所にて」とある。地名を家の入口にかけて云つたので時鳥よ何の何某宿といふやうに宿札の名を名のれ、といふのである。

黒焼釜わつて捨けりほとゝぎす

(一葉集)

時鳥が一聲過ぎた、其音のあはれなるに心をうたれて、鳥獸の黒焼を業にしてゐたものが、飄然其黒焼釜を割て捨ててしまった、といふのである。

時鳥いまだ俳諧師なき世かな

(一葉集)

時鳥今は俳諧師なき世かな

(鹿島紀行附録)

前句は、時鳥の音を聞いて、未だ此世に俳諧師などいふものなき世なるかな、と、あだかも身の太古に在るが如き感じのあることを詠歎したのであり、後句は、今は眞の俳諧師のなき世なるかな、と詠歎したのである。後句は構想平凡であるが、前句には一種の觀念がある。

笈負僧

みえばやな出立くのほとゝぎす

(一葉集考證)

上五が「みばや」「みらればや」何れでもないので何と解すべきかに苦しむ。或は笈を負つていつも下かがみの姿勢で行くので、早起の朝々だけでも、時鳥の啼く音ばかりでなく、其姿にもまみえばやな、と希望を詠歎したものであらうか。

又越む 佐夜の中山はつ 松魚

(もとの水)

西行の「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山」といふ歌がある。われも初松魚の東路へ、命なりけりと思ひつつ、また佐夜の中山を越えん、といふのである。

五月の雨 卷柏の緑いつ迄ぞ

(茜 掘)

岩檜葉は陰性の植物で、曇り日や雨には元気がよいが、暑中のかん／＼照りになると葉を巻きぢぢめて水分の蒸發を防ぐべく努力する。それで今この五月雨の中で翠をたもつてゐるが、やがて土用になるのだから、この翠が果していつまでぞ、と現在を愛で將來を隣れんだのである。

さみだれや此笠森をさしも草

(一葉集)

「笠森」は地名で「さしも草」は夫木集に「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを、光俊」とある通り蓬のことである。五月雨の降る中に、蓬はこの笠森をさしてゐる、といふべきを、「笠森をさしも草」と掛け調に云つたのである。

長 貞 亭

海ははれてひえ降の寺五月かな

(一葉集考證)

湖ははれて比叡降のこす五月哉

(芭蕉翁發句拾遺)

前句は明かに誤りで、湖は霽れて五月雨が猶比叡を降りのことす、といふのである。

野に臥こともたのしきやなど、あるじの問ければ

一疑 問

九二七

さみだれに 寒いまゝなり 旅すがた

(一葉集考證)

あるじの間に答へて、いや／＼さうでもない、この旅姿を見られよ、五月雨の降る今猶寒い時のままである、と答へたのである。

しなのの洗馬

つゆはれの わたくし 雨や雲ちぎれ

(もとの水)

「私雨」とは降るか降らぬわからぬ位にひそかにふるのをいふ。黒雲がちぎれて、梅雨の晴れきわの目に見えぬやうな雨やナア、と詠歎したのである。

檜山 や 柴 して 戻 る 夏 の 雨

(もとの水)

檜山やと先づ場所を示し、夏の雨に里人が柴を刈つて戻つて行く、といふのである。

名所八体の内

秋 や 須 磨 す ま や 秋 知 る 麥 日 和

(もとの水)

今や麥秋のよい日和であるが、これは麥秋がや須磨を知るだらうか、或はまた須磨がや麥秋なることを知るだらうかと疑つたのである。

こゝも 三河 びら さ き 麥 の か き つ ば た

(一葉集)

こゝも三河の國とて八橋の燕子花に名高いだけあつて、紫色の麥がその燕子花の如く熟れてゐる、といふのである。